仙台市文化財調査報告書第240集

原　遺　跡

－第３次発掘調査報告書－

１９９９年12月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第240集

原　遺　跡

－第３次発掘調査報告書－

１９９９年12月

仙台市教育委員会

序　　文

日頃より、仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大の御協力を頂き、担当する仙台市教育委員会にとりまして、誠に感謝にたえません。

西多賀地区は古くからの住宅地の中で、多くの緑が残っていたところでありますが、近年は、隣接する仙台市南部の副都心と位置づけられる太白区長町・富沢地区の発展とともに、新しく生まれ変わりつつあるところであります。

この度の原遺跡の調査は平成９年度に続いて第３次調査として実施され、数々の貴重な成果が得られました。本報告書はその成果をまとめたものであります。

まもなく21世紀を迎えようとしている中で、先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ、後世に継承していくことは私達に課せられた責務と考えております。ここに報告する調査成果がこうした意味で研究者のみならず、市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行に際しまして、多くの方々の御協力、御助言を頂きましたことを深く感謝申し上げ序といたします。

平成11年12月

仙台市教育委員会

教育長　小　松　弥　生

本　文　目　次

序
例言
凡例
Ⅰ．調査要項……1
Ⅱ．調査方法……1
Ⅲ．基本層序……2
Ⅳ．検出された遺構と遺物……3
　1．古墳……4　　2．竪穴遺構・竪穴住居跡……18
　3．土坑・溝跡……24
Ⅴ．まとめ……25

例　　言

1．本書は店舗建設に先立って行った原遺跡の第３次発掘調査の報告書である。
2．図面整理は佐藤洋が、出土遺物の整理は主浜光朗が担当し、本書の編集は主浜が行った。
　尚、本文の執筆はⅢ及びⅣ－１・２・３を佐藤、主浜が、その他を主浜が行った。
3．遺跡の概要については、本遺跡の第１次・第２次発掘調査報告書と重複するため割愛する、そちらを参照していただきたい。
4．本調査における出土遺物、図面、写真等の資料は仙台市教育委員会で一括保管しているので活用されたい。
5．発掘調査、報告書作成にあたって次の方々のご指導、ご助言、ご協力を賜った。
　勝村建設株式会社東北支店　　藤沢　敦

凡　　例

1．本書中の土色及び遺物の色調については「新版標準土色帖」（小山、竹原1997）を使用した。
2．本書の文章、実測図中の方位は真北で統一してある。
3．本書中の遺構略号は以下のとおりで、それぞれに通しNo.を付けた。このNo.は第１次・第２次調査からの通しNo.である。
　ＳＩ：竪穴遺構・竪穴住居跡　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝跡
4．本書中の遺物略号は以下のとおりに表している。
　Ｃ：ロクロ不使用の土師器　　Ｄ：ロクロ使用の土師器　　Ｅ：須恵器　　Ｎ：金属製品　　Ｐ：土製品
　Ｓ：埴輪
5．円筒埴輪、朝顔型埴輪の各部の名称は仙台市文化財調査報告書第108集『大野田古墳群　春日社古墳・鳥居塚古墳　発掘調査報告書』の記述に依った。

Ⅰ．調査要項

遺　跡　名　原遺跡（宮城県遺跡番号01083、仙台市文化財登録番号C-154）

所　在　地　仙台市太白区西多賀三丁目１番地

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会文化財課調査第２係
担当職員　佐藤　洋、主浜　光朗、
五十嵐　康洋、

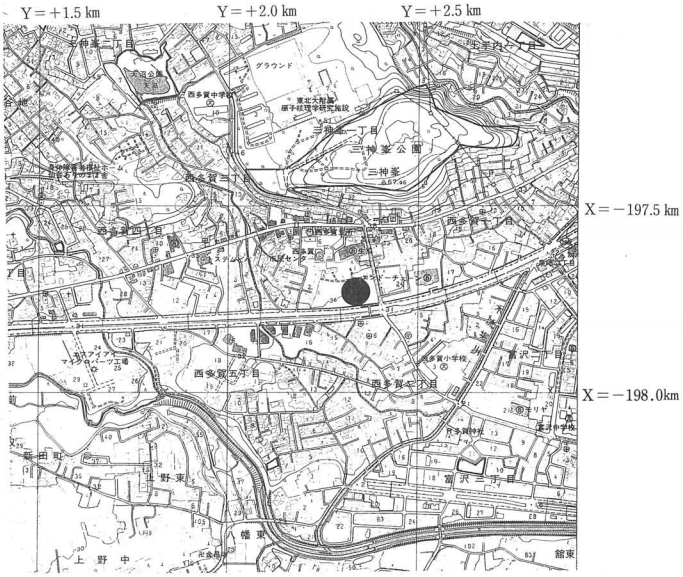
調査期間　平成10年８月３日～同年10月６日

調査対象面積　約4,100㎡（発掘面積：約1,600㎡）

調査参加者　（野外調査）阿部　敬子、阿部八重子
板橋　栄子、板橋　静江、植野美登子
遠藤いな子、小川　良子、小野紀美子
神崎　是夢、菊地　恵子、菊地　紘二、小林　斎美、佐藤　清治、佐野たみえ、島崎なつ子
菅原　弘、鈴木きぬ子、高橋たづよ、早川　裕子、菱沼みのり、松野　順子、三浦たか子
三浦つよの、吉田　公治、渡辺　芳裕
（室内整理）相沢美佐子、石川カツ子、井上里映子、小林　由美、斎藤喜恵子、小泉　幸子
佐藤　洋子、佐藤　優子、高橋　弘子、千葉　朱実、森谷　愛子、若生　洋子、渡辺まき子

申　請　者　株式会社コナカ

調査協力　勝村建設株式会社東北支店

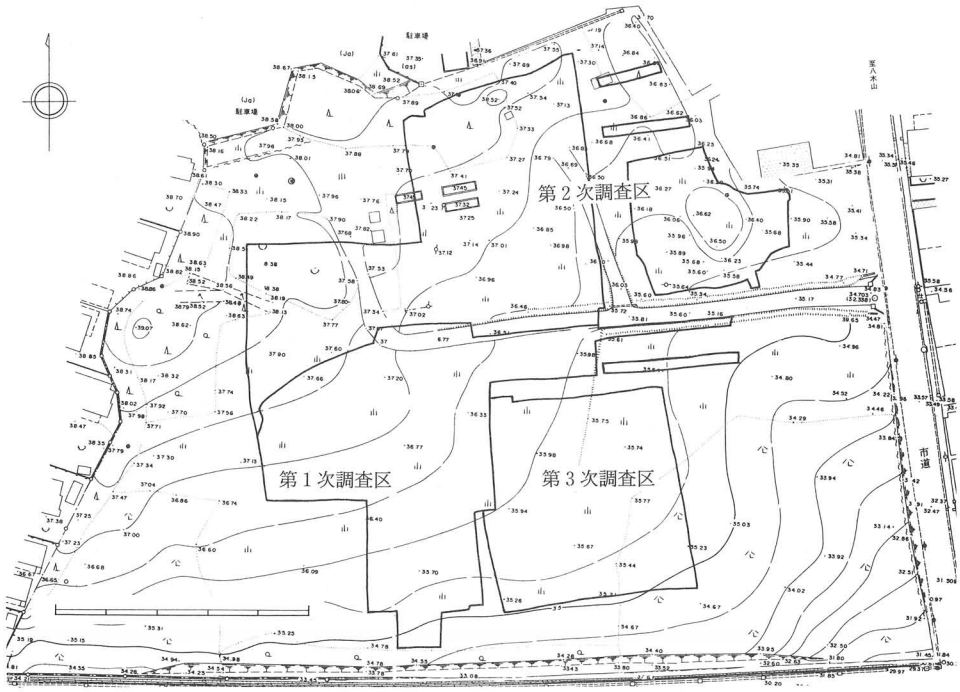


第１図　調査区位置図（1/20,000）

Ⅱ．調査方法

１．調査区の設定

原遺跡は、平成８年９月20日に提出された発掘届により、宅地造成第一工区の範囲を平成８年度に１次、９年度に２次調査として発掘調査を実施した。第一工区の南東に隣接する第二工区については、２次調査時に、遺構密度が希薄であることが予想された東側の谷部と南側の斜面下部に試掘トレンチを設定して遺構の分布範囲を確認した。その結果、遺構の存在の認められなかった範囲については、第二



第２図　調査区設定図

工区の調査範囲から除くこととした。この地域は２次調査終了後、第一工区を削平した際の土砂を盛り、暗渠排水の工事を終わっていた。

３次調査区は、２次調査区の南東に隣接して、暗渠工事の終了している部分より西側に設定した。２次調査終了後に行われた第一工区の造成工事のため、２次調査区とのあいだに北側で幅約4.5m、南西側で幅３～５ｍの調査できない地域が生じてしまった。また、暗渠工事の区域は図面上では、遺構の分布範囲の外側であったが、実際には後述するように、遺構にかかっている部分があった。

１・２次調査時の測量基準杭が既に消失しており、３次調査区では新たに測量基準杭を設定しなければならなかった。調査区内に、国家座標を基準として10m×10mのグリッドを設定し、南北軸を北からアルファベット文字で表し、東西軸をアラビア数字で表して両者の組み合わせグリッド名を表すこととした。原点の平面直角座標系Ｘにおける座標はＸ＝－197.710㎞、Ｙ＝2.340㎞である。

２．調査方法

重機によって盛土、旧表土を除去した後、人力で精査を行った。遺構検出面以下の層については、２次調査時に下層からの遺構、遺物の検出がなく、今回の３次調査で火山灰層にまで達している攪乱の壁面でも下層に遺構、遺物の存在の可能性を示す資料がみられなかったため、下層調査は行わなかった。

遺構の測量は、グリッドの交点に設けた基準点を利用した簡易遣り方によって1/40の全体図及び、1/20の遺構平面図を作成し、土層断面図、エレベーション図は1/20の実測図を作成した。記録写真は35㎜モノクロ、カラーリバーサルを用いた他、35㎜カラープリントで随時作業状況の撮影を行なった。

Ⅲ．基本層序

今回の調査区では、比較的攪乱や削平を免れた調査区北壁中央部（Ａ－３区）で、SD－３の東側の土層を基準とした。

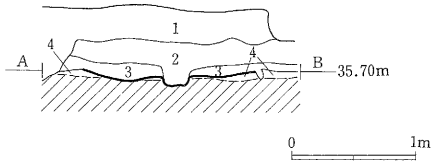
第１層　暗褐色～褐色のシルトブロック層。砂や礫を多量に含む。１次調査後の工事に伴う盛土層である。

第２層　10YR3/1黒褐色シルト層。層厚約20㎝。この層は盛土以前の表土であるが、東部や南部では削平されたためか確認されない。現代の畑の耕作土である。

第３層　10YR2/2黒褐色シルト層。層厚７～14㎝。この層は、調査区北壁中央部付近やSD－３の周辺で認められる。他の場所では削平のためか確認されない。南西部ではこの層に変わって、２層の耕作による天地返しによって形成された層が厚く堆積している（第３図）。

第４層　10YR5/8黄褐色粘土質シルト層。火山灰層である。層厚は不明であるが、調査区のほぼ全面に分布している。今回の調査で検出された遺構はこの上面で確認されたものが大部分である。本層以下は無遺物層であると考えられる。

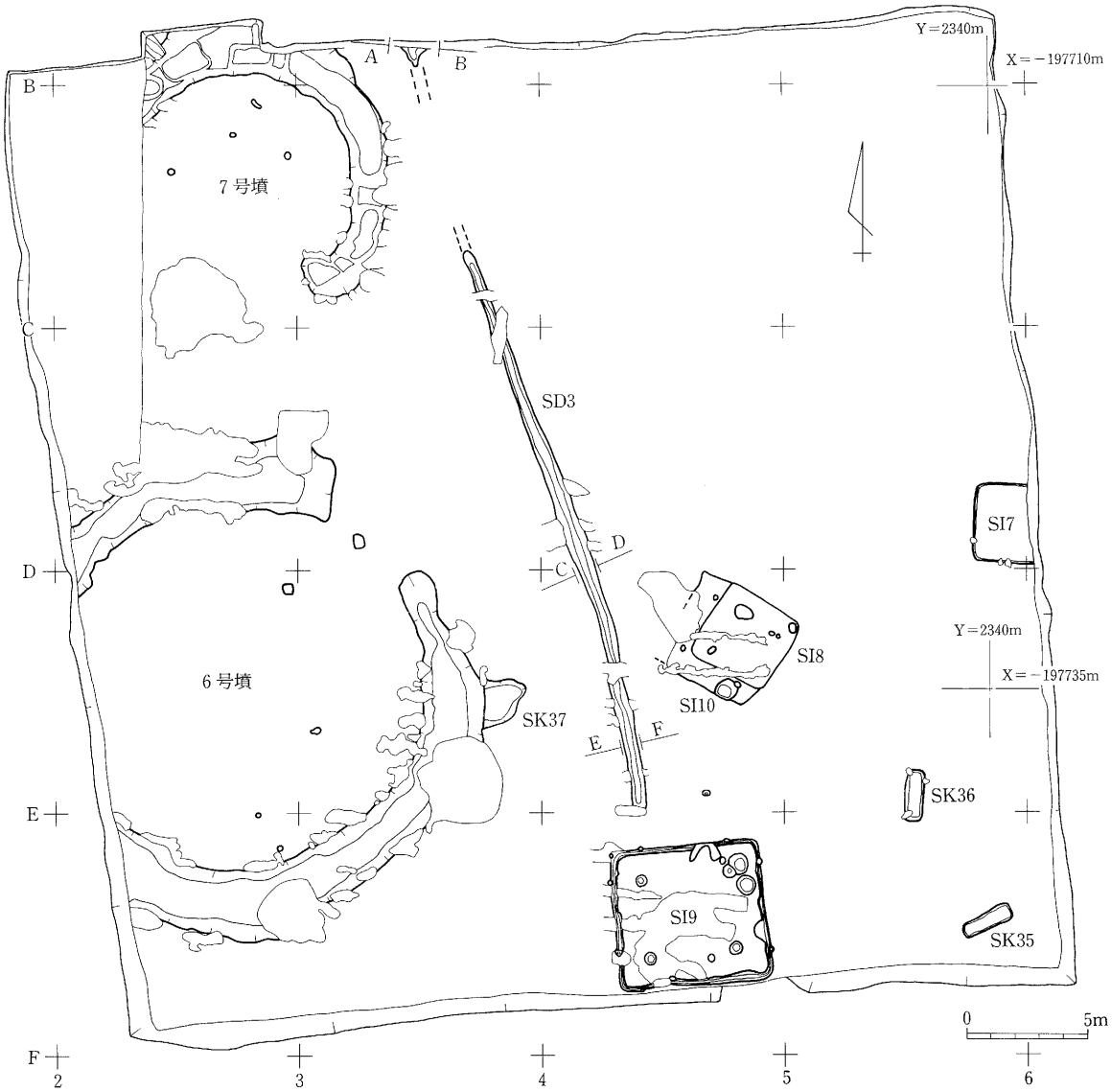
第５層　砂礫層。礫は円礫で、段丘堆積物または、泥流堆積物と予想している。周溝が途切れる６号墳北東部から７号墳の南部にかけて露出して見えている。一部の遺構はこの上面で確認されている。



層　位	No.	土　色	土　性	備　考
基本層１層	1			盛土（１・２次調査後のもの）。
基本層２層	2	10YR3/1　黒褐	シルト	調査区北側中央付近に分布。礫、ビニール紐等が混入、人為的に盛った表土？
基本層３層	3	10YR2/2　黒褐	シルト	調査区北側中央付近に分布。
基本層４層	4	10YR5/8　黄褐	粘土質シルト	上面は攪乱多い。

第３図　調査区北壁中央土層断面図（SD－３部分）

これらの層の１・２次調査の基本層序との対応関係は、第１～３層が１・２次調査のⅠ層に対応し、第４層がⅢ層に、第５層がⅣ層に対応するものと考えられ、１・２次調査で確認されたⅡ層は、今回の調査区が斜面の下部に向かう部分であることと、畑の耕作で削平されたためか確認できなかった。



第４図　遺構配置図

Ⅳ．検出された遺構と遺物

第１次･第２次調査（以下、前回の調査とする）で検出された遺構は、円墳10基、竪穴住居跡６軒、土坑34基（埴輪棺墓１基含む）、溝跡６条であった。今回の第３次調査では、円墳２基、竪穴住居跡３軒、竪穴遺構１基、土坑３基、溝跡１条を検出した。このうち円墳２基と溝跡１条は前回の調査で検出された６号墳、７号墳、SD-3溝跡の延長部分である。各々の遺構は、基本層第２層耕作土の天地返しが溝状に走っているため、遺構検出面である第３層が著しく攪乱を受けており、遺存状況は良くない。出土遺物は円筒埴輪を中心に土師器、須恵器、鉄製品等整理用コンテナで約15箱である。

1．古墳

6号墳（第5図～第6図・写真4～写真8）

概　　要

調査区南西部C～E－2・3区、古墳群のなかでは1号墳とともに南端部の最も低い場所に位置している。SK－37土坑と重複関係にあり、SK－37土坑を切っていることから本遺構が新しい。また、上部が削平されているうえに、耕作による攪乱坑や倒木痕によって切られている。前回の調査の1号墳・2号墳と西側で接しており、特に2号墳に面する北西側の外側のラインは直線的になっていた。2次調査時に本遺構の西側1/4程度を調査しており両調査区の間の南西の一部を除いてほぼ全体を調査したことになる。確認面は基本層第4層上面であるが、北側の一部は第5層上面になっており、南側に傾斜し、その比高差は約50cmである。墳丘は既に失われており、主体部についても既に削平されているものと思われ、周溝のみを確認した。

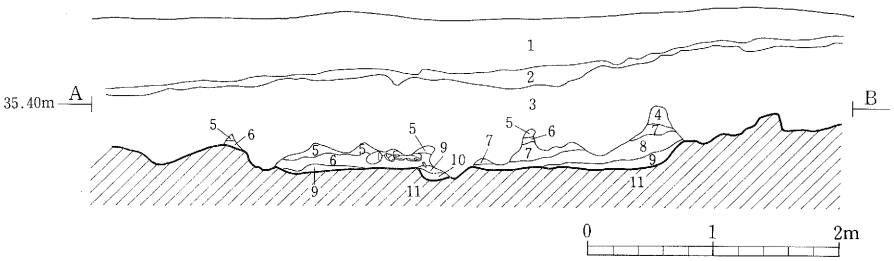
古墳の平面形は、北東側の一部が途切れているが、周溝内側の墳丘部が円形であり、円墳であると思われる。規模は墳丘部の直径約15.3m、周溝を含む外径が約19m～20.8mである。この規模は、本遺跡では第2次調査の11号墳に次ぐ2番目のものである。

周　　溝

周溝は幅約1.7m～3mで北東部が狭くなっている。深さは最も残存状況の良い南側で36cmである。北側ほど浅くなっている。断面形は皿形で壁の立ち上がりは緩やかである。底面は基本層第4・第5層からなっており、小さな起伏が見られる。第5層を底面とする部分は特に浅くなり、北東部の周溝が途切れている部分については、前回の調査の報文に述べられているように、上部の削平により消失してしまった部分と思われる。周溝内の堆積土は自然堆積であり、堆積土中位に灰白色火山灰が小ブロック状に認められた。

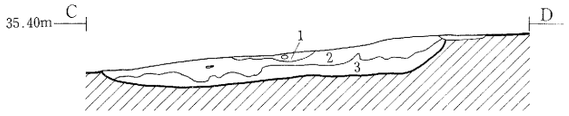
出土遺物

周溝堆積土から埴輪片が約2250点(約42.3kg)、剝片5点が出土した。2次調査時に西側部分から出土した遺物と合わせると埴輪約4120点(約73.3kg)、剝片9点が出土している。遺物の出土状況をみると、埴輪の出土は南側ほど多くなっており、東および、北側では少なくなっている。西側で遺物数の半数近くが出土していたことになる。また、南側の周溝を切る倒木痕から土製の勾玉が1点出土している。図示したものは28点で、このうち朝顔形埴輪が2点、円筒埴輪が25点で、土製勾玉1点もここに掲げた。

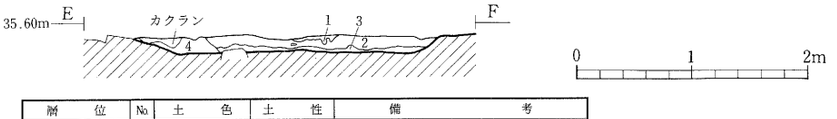


層　　位	No.	土　　色	土　　性	備　　考
基本層第1層	1			第1次・2次調査後の盛土。
基本層第2層	2	10YR2/2　黒褐	シルト	
基本層第3層	3	10YR3/2　黒褐	シルト	
6号墳周溝堆積土	4	10YR3/3　暗褐	シルト	
	5	10YR2/1　黒	シルト	炭化物を少量含む。
	6	7.5YR3/2 黒褐	シルト	
	7	10YR3/4　暗褐	シルト	小礫を少量含む。
	8	10YR3/3　暗褐	シルト	
	9	10YR3/3　暗褐	シルト	層No.8よりやや暗い、ロームブロック多量に含む。
木根痕	10	10YR3/3　暗褐	シルト	
基本層第4層	11	10YR4/6　褐	粘土質シルト	ローム層。

第5図　6号墳西側壁土層断面図



層　位	No.	土　色	土　性	備　考
周溝堆積土	1	10YR2/2　黒褐	シルト	
	2	10YR3/3　暗褐	シルト	層下部は褐色に徐々に移行する。
	3	10YR4/4　褐	シルト質粘土	層下部に向かって徐々に砂礫が多くなる。



層　位	No.	土　色	土　性	備　考
周溝堆積土	1	10YR2/1　黒	シルト	
	2	10YR2/2　黒褐	シルト	
	3	10YR4/4　褐	シルト	
	4	10YR4/6　褐	シルト	

第6図　6号墳

埴輪（第７図～第12図・写真28～写真32）

出土埴輪について１次・２次調査報告書の基準（以下前回の基準とする）に則して分類する。

前回の調査で出土した埴輪は、円筒埴輪ではスカシ孔が半円形の３類と、調整技法から２か３類、５か６類と考えられるもの、朝顔形埴輪の可能性のあるものであり、細別分類のできるものは出土していない。

今回の調査では、円筒埴輪と前回の調査報告では可能性が指摘されていたのみの朝顔形埴輪が確認された。大部分が円筒埴輪で、朝顔形埴輪と判別できるものは少ないが、朝顔形埴輪の製作技法は基本的に円筒埴輪と同じであり、朝顔形埴輪と判別された点数以上に存在していたものと思われる。

朝顔形埴輪（第７図）

点数が少ないため１次、２次調査と同様に分類はできないが、肩部が張り、肩部外面に横方向のハケメが見られる。円筒部は３段であり、３段目の上側に寄った位置に半円形のスカシ孔、２段目の中央に楕円形あるいは円形の小孔が90°ずらして配置されている。肩部にヘラ描き沈線が施されているものがある（２）。

円筒埴輪

円筒埴輪は全体の器形が判るものは少ないが、スカシ孔が半円形の３類のもの、器形及び調整技法から４類のものと５類のものがある。

３類

3a 類、3b 類と判別できるものは今回出土した埴輪のなかにはみられなかった。

3c 類（第８図１～４）１はスカシ孔に欠けている部分があるが、整った半円形である可能性がある。内面調整は３段目のみ斜め方向のハケメが施され、以下は縦方向のナデである。前回の基準ではスカシ孔が整った半円形のものは3a 類とされているが、内面調整が3c 類のもので、スカシ孔に欠けている部分があり、判然としない点もあることからこの類とした。２～４は１と同様の調整であるが、スカシ孔がやや歪んだ半円形のものである。３段目の内面に斜め方向のヘラ描き沈線が施されるもの（２）、３段目が狭くなっているもの（３）がある。

４類

外面は１次調整タテハケのみであり、内面調整は斜め方向のハケメと縦方向のナデが施されているもの、縦方向のナデのみが施されているものがある。スカシ孔は円形で、いずれも口縁部内面に軽い段が付いている。内面調整に斜め方向のハケメが施されているものは前回の基準では４類にはみられないが、その他の特徴について前回の基準に照らしてこの類とした。

4a 類と判別できるものは今回出土した埴輪のなかにはみられなかった。

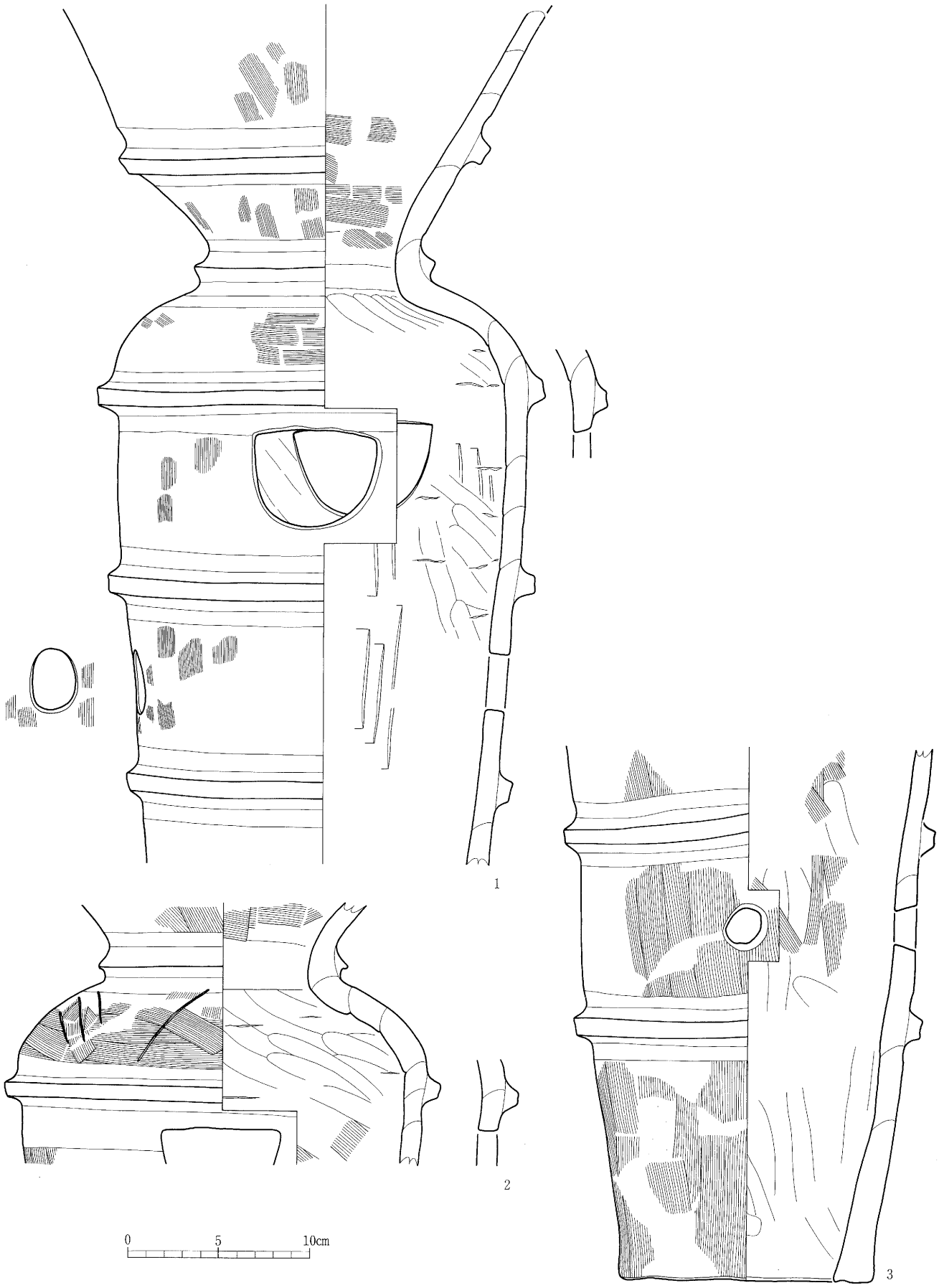
4b 類（第９図１）器形は３段目がやや開き、内面調整は３段目のみ斜め方向のハケメで、以下は縦方向のナデが施されている。３段目の内面に斜め方向のヘラ描き沈線がみられる。

4c 類（第９図２）基部が欠けているが、底径が小さくなるものであると考えられるためこの類とした。

その他細別分類できないものの中に、３段目の内面に斜め方向のヘラ描き沈線がみられるものがいくつか認められる。

５類（第11図３）

外面は１次調整タテハケのみで、内面調整は斜め方向のハケメとその後に縦方向のナデが施されている。スカシ孔は円形である。全体形は直線的に開き、口縁内部に軽い段が付いており、端部がわずかに窪む。基部が厚くなっている。内面に斜め方向のハケメが施されるものは前回の基準で５類としたものにはみられないが、その他の特徴について前回の基準に照らしてこの類とした。

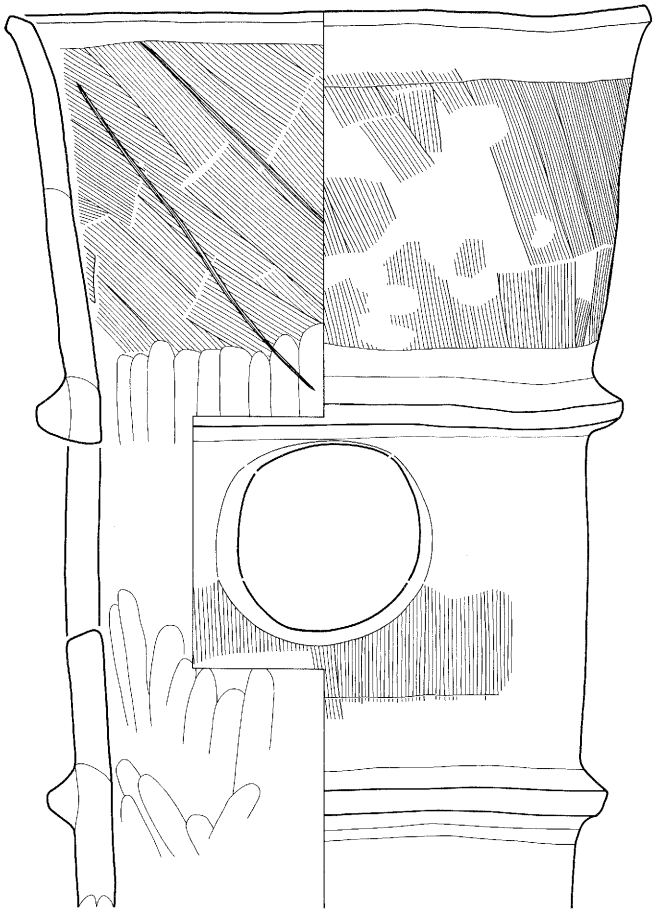


No.	登録番号	種　別	層　位	外面調整・色調	内面調整・色調	スカシ孔	備　考	写真図版
1	S－9	朝顔形埴輪	周　溝	屈曲部 タテハケ、肩部 ハケメ（斜・横） 2.5YR4/6	屈曲部 ヨコハケ、肩部 ナデ(横) 5YR5/6	半円形		29－1
				円筒部 タテハケ、凸帯 ヨコナデ	円筒部 上部 ヘラナデ(横)、下部 ナデ(斜・縦)	楕円形		
2	S－11	朝顔形埴輪	周　溝	屈曲部 タテハケ、肩部 ハケメ(横・縦)、凸帯 ヨコナデ、沈線 7.5YR6/6	屈曲部 ヨコハケ、肩部 ヘラナデ 5YR6/8	半円形	3と同一個体	30－1
3	S－10	朝顔形埴輪	周　溝	円筒部 タテハケ、凸帯 ヨコナデ 7.5YR6/6	円筒部 ナデ・ハケメ(縦) 5YR6/8	楕円形	底面棒状圧痕	30－2

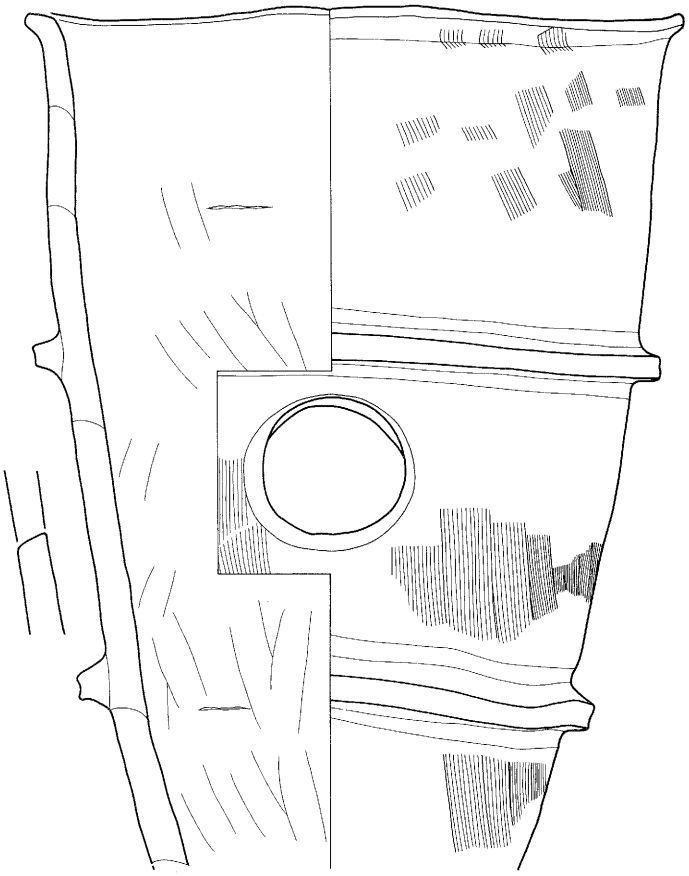
第7図　6号墳出土遺物（1）

No	登録番号	種別	層位	外面調整・色調		内面調整・色調		スカシ孔	備考	写真図版
1	S－12	円筒埴輪	周溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ	5YR5/6	3段目ハケメ(横・ナナメ) ナデ(縦)	5YR4/6	半円形	底面棒状圧痕 3c類	30－3
2	S－5	円筒埴輪	周溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ	2.5YR5/6	ハケメ(斜) ナデ(縦)	2.5YR5/6	半円形	3c類	30－4
3	S－3	円筒埴輪	周溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ	5YR5/6	ハケメ(斜)	5YR6/4	半円形	3c類	
4	S－6	円筒埴輪	周溝	タテハケ、凸帯 ヨコナデ	5YR5/6	ハケメ(斜) ナデ(斜)	7.5YR5/6	半円形	3c類	

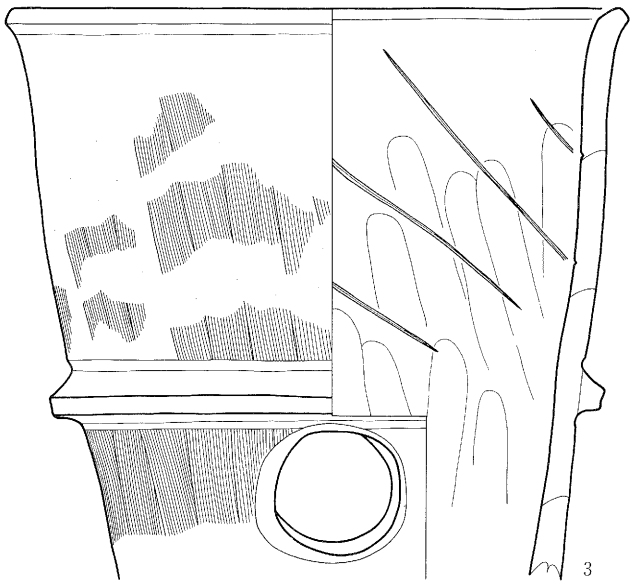
第8図　6号墳出土遺物 (2)



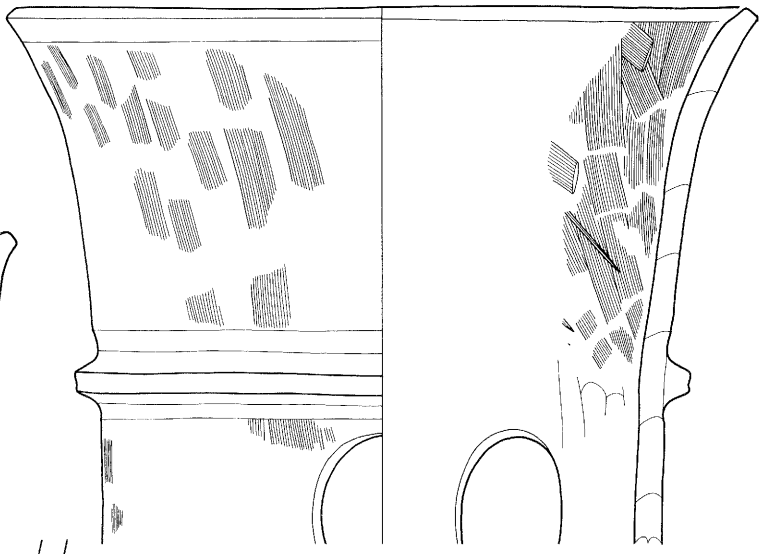
1



2



3

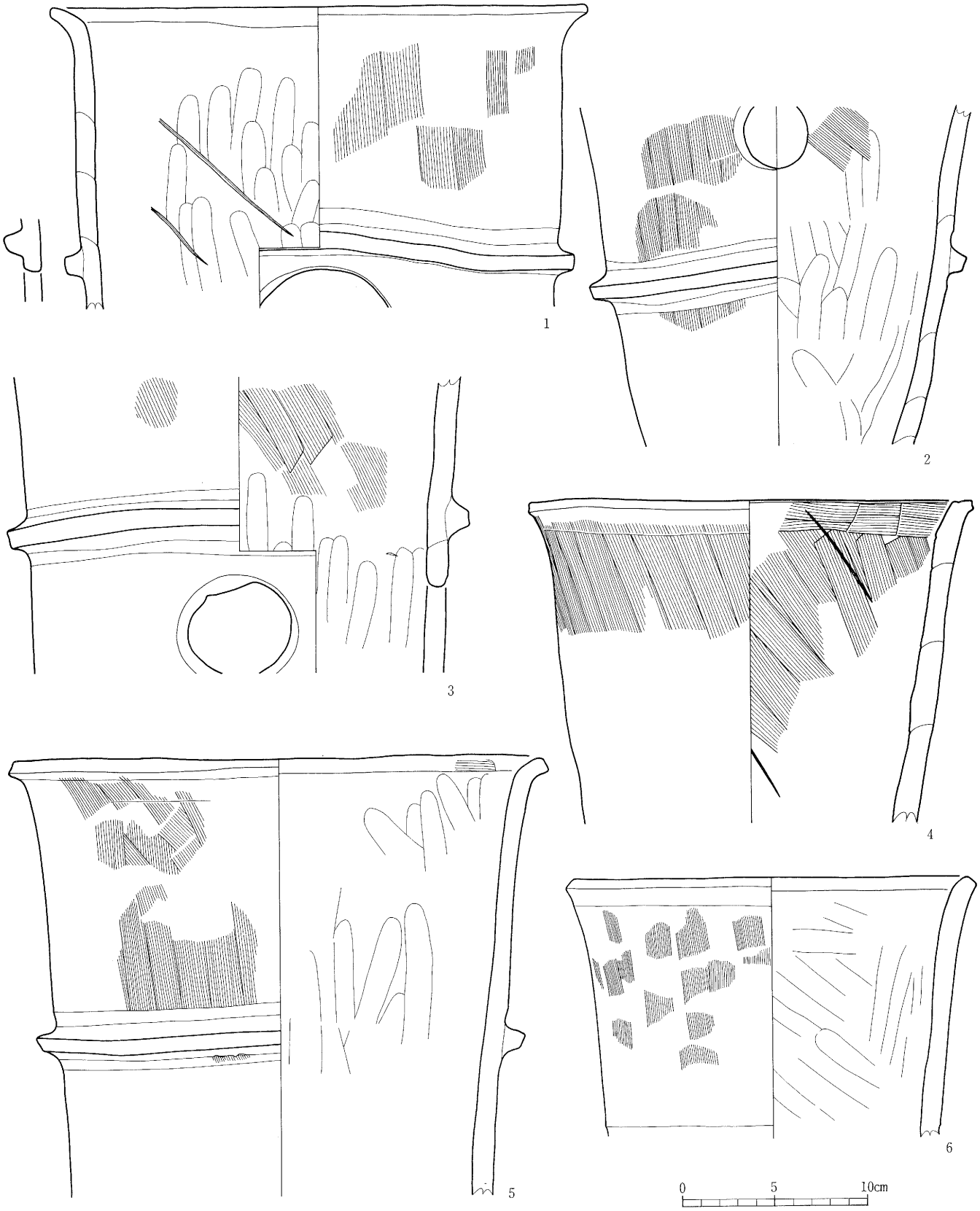


4

0 5 10cm

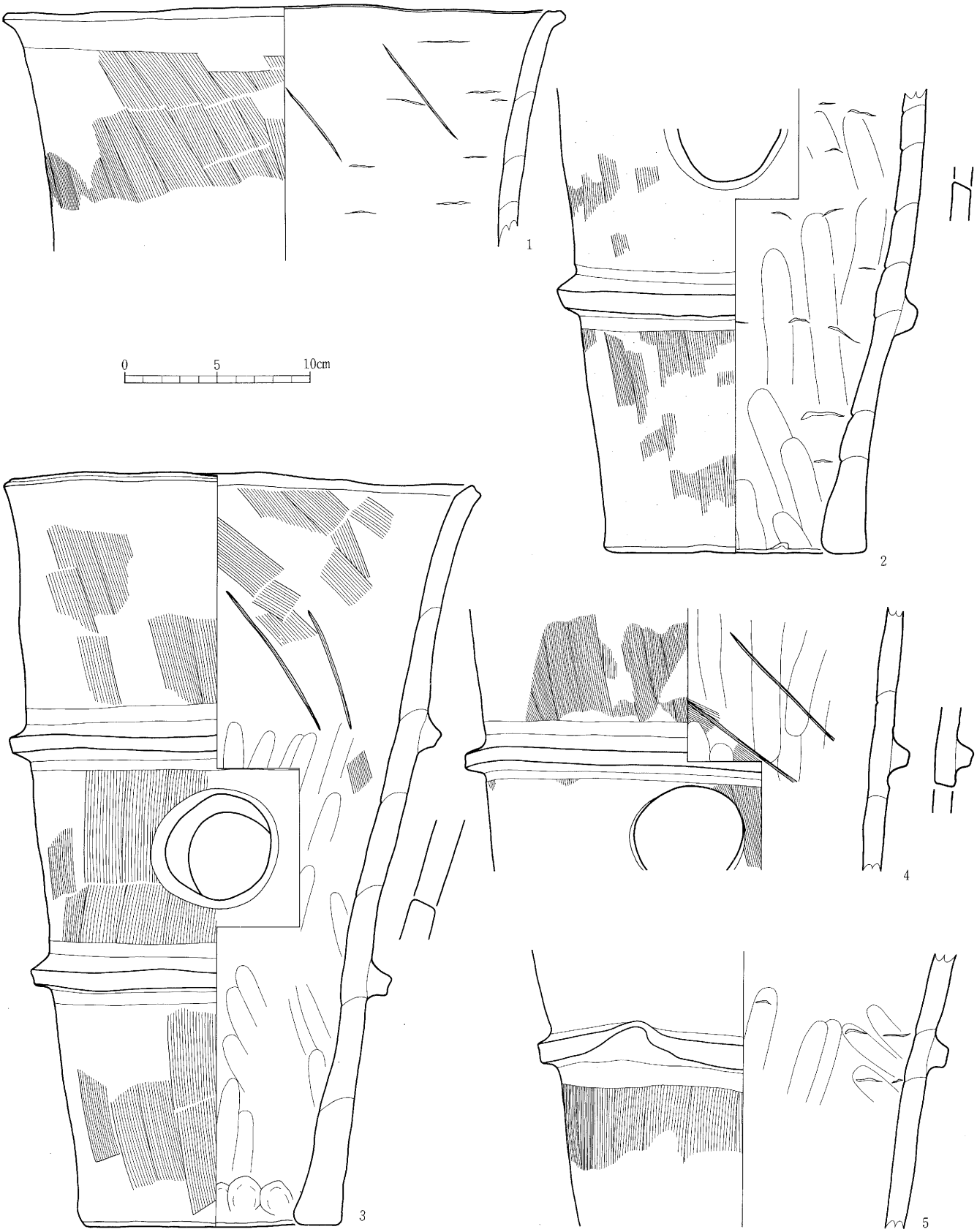
No.	登録番号	種別	層位	外面調整・色調	内面調整・色調	スカシ孔	備考	写真図版
1	S－2	円筒埴輪	周溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ 2.5YR5/8	ハケメ(斜) ナデ(縦)、口縁部 ヨコナデ 2.5YR5/6	円形	4b類	30－5
2	S－1	円筒埴輪	周溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ 5YR6/6	ナデ(縦) 5YR6/6	円形	4c類	31－1
3	S－21	円筒埴輪	周溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ 5YR4/8	ナデ(縦) 沈線(斜) 7.5YR5/6	円形	4類	31－2
4	S－7	円筒埴輪	周溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ 7.5YR6/6	ハケメ(縦) ナデ(縦)、沈線(斜) 7.5YR6/6	円形	4類	31－3

第9図　6号墳出土遺物 (3)



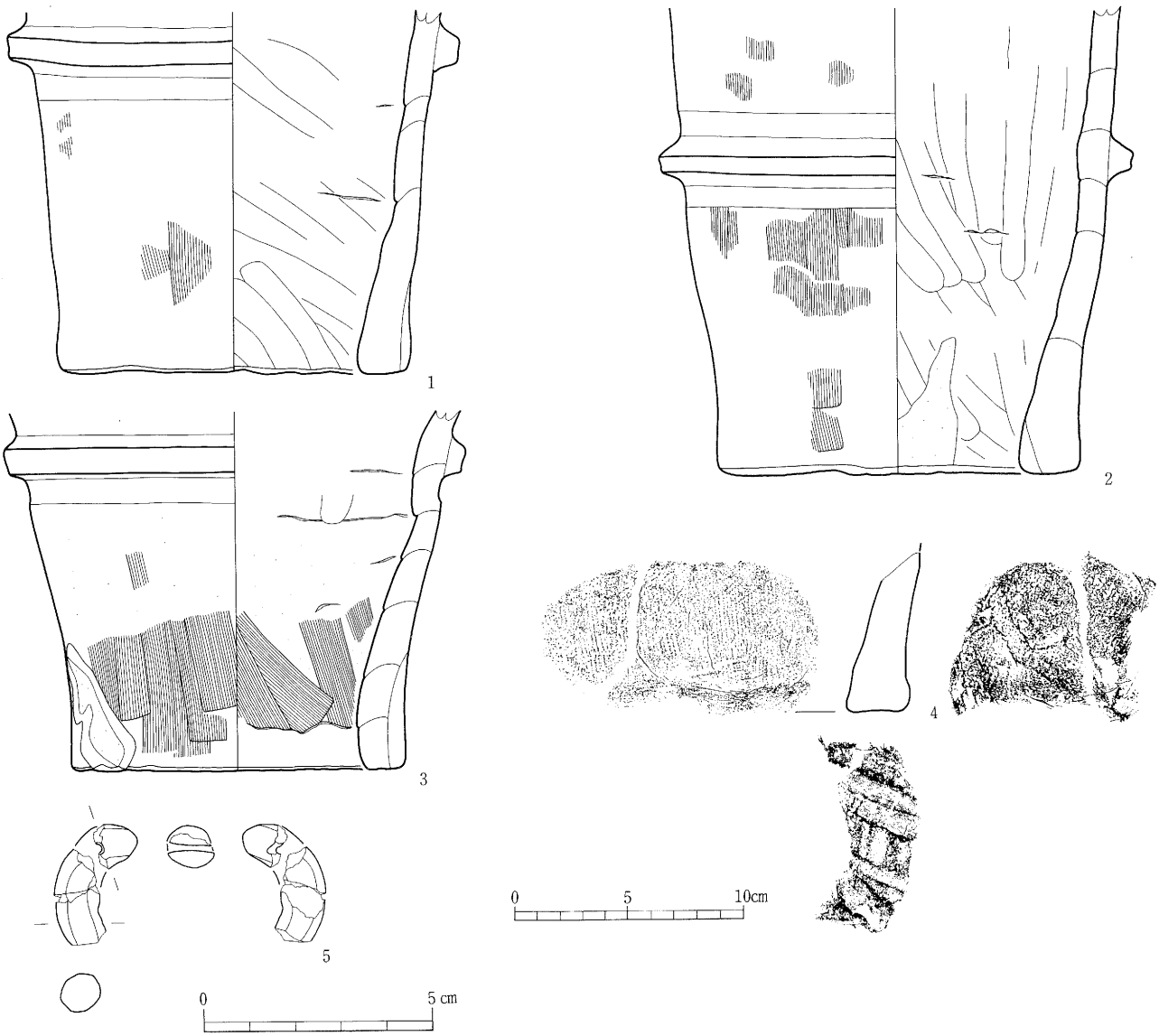
No	登録番号	種　別	層　位	外面調整・色調		内面調整・色調		スカシ孔	備　考	写真図版
1	S−22	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ	7.5YR6/6	ナデ(縦)　沈線(斜)	7.5YR7/8	円　形	4類	31−4
2	S−23	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、凸帯 ヨコナデ	5YR5/6	ハケメ(斜)　ナデ(縦)	5YR5/6	円　形	4類	
3	S−17	円筒埴輪	周　溝	ハケメ(斜)、凸帯 ヨコナデ	5YR6/8	ハケメ(斜)　ナデ(縦)	5YR6/6	円　形		
4	S−18	円筒埴輪	周　溝	ハケメ(斜)、口縁部 ヨコナデ	5YR6/6	ハケメ(横・斜)、口縁部 ハケメ(横)	5YR6/6			31−5
5	S−24	円筒埴輪	周　溝	ハケメ(斜・縦)、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ	2.5YR5/8	ナデ(縦)、口縁部 ハケメ(横)	2.5YR5/8			
6	S−25	円筒埴輪	周　溝	タテハケ・ヨコナデ、口縁部 ヨコナデ	2.5YR4/6	ナデ(斜)、口縁部 ヨコナデ	2.5YR4/8			31−6

第10図　6号墳出土遺物 (4)



No.	登録番号	種　別	層　位	外面調整・色調	内面調整・色調	スカシ孔	備　考	写真図版
1	S−19	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ　5YR5/6	磨滅・沈線(斜)　5YR6/8			32−1
2	S−20	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、凸帯 ヨコナデ　5YR5/6	ナデ(縦)　5YR5/8	円形？	底面棒状圧痕	32−2
3	S−8	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ　2.5YR5/8	ハケメ(斜)　ナデ(縦)　沈線(斜)　指頭痕　2.5YR5/6	円　形	底面棒状圧跡　5類	32−3
4	S−13	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、凸帯 ヨコナデ　5YR4/6	ナデ(縦)　ハケメ(斜)　沈線(斜)　5YR5/6	円　形		
5	S−14	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、凸帯 ヨコナデ　5YR5/6	ナデ(縦・斜)　7.5YR5/4			

第11図　6号墳出土遺物 (5)



No.	登録番号	種　別	層　位	外面調整・色調		内面調整・色調		スカシ孔	備　考	写真図版
1	S－26	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、凸帯 ヨコナデ	7.5YR5/6	ナデ(斜)	5YR6/6		底面棒状圧痕	
2	S－15	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、凸帯 ヨコナデ	5YR5/6	ナデ(縦)	5YR5/6		底面棒状圧痕	32－4
3	S－4	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、凸帯 ヨコナデ	2.5YR4/6	ナデ(縦) ハケメ(縦・斜)	5YR4/8		底面棒状圧痕	32－5
4	S－16	円筒埴輪	周　溝	タテハケ	2.5YR5/6	ナデ	2.5YR5/6		底面棒状圧痕	
5	P－1	勾　玉	倒木痕	長さ(26.0mm)×幅10.0mm×厚さ10.0mm・重さ2.6g　(　)残存長				――		32－6

第12図　6号墳出土遺物 (6)

7号墳（第13図・写真9～写真13）

概　要

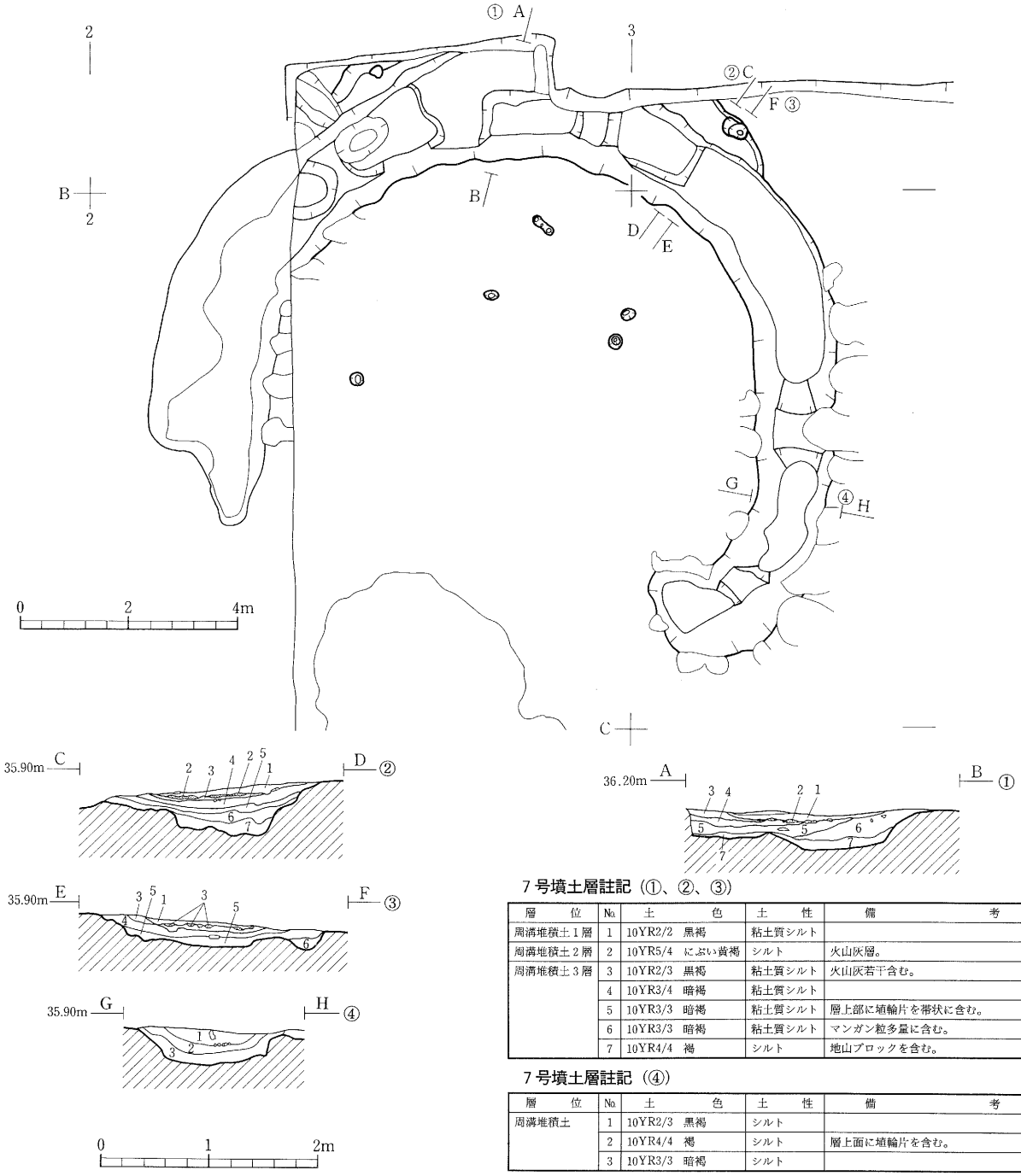
調査区北西部A～C－2・3区に位置し、調査区内では他の遺構との重複関係はない。また、上部が削平されているうえに、耕作による攪乱坑によって切られ、墳丘部や周溝の切れる部分には倒木痕がみられる前回の調査時の2号墳と接しているが本遺構の周溝が途切れており、直接の関係は不明である。6号墳同様2次調査時に本遺構の西側部分を調査しており、両調査区の間の北側の一部を除いてほぼ全体を調査したことになる。確認面は基本層第4層上面であるが、南側の一部は第5層上面になっており、南東側に傾斜し、その比高差は約25cmである。墳丘は既に失われており、主体部についても既に削平されているものと思われ、周溝のみを確認した。

古墳の平面形は、南側が途切れているが周溝内側の墳丘部が円形であると考えられ、円墳であると思われる。規

模は、残存部から推定すると、墳丘部の直径約9.2m、周溝を含む外径が約12.4m程であると思われる。この規模は、本遺跡でこれまでに発見された円墳のなかでは最も小さい。

周　溝

周溝は幅約1.28m～1.8mで東側がやや狭くなっている。深さは31cm～53cmで、北西部が最も残存状況の良い部分である。北側には調査区外へ広がる幅2.5m前後と考えられる張り出し部があり、この部分の深さは10cm～20cmと周溝より浅くなっている。周溝の断面形は浅い「U」字形を呈している。周溝底面は基本層第4・第5層からなっており、平坦ではなく、土坑状の凹部や土橋状の高まりがあり、起伏に富んでいる。これらの起伏の、成因として周溝掘削時の作業単位を示している可能性が考えられる。また、南側の周溝が途切れている部分は、6号墳と同様に、上部の削平により消失してしまった部分であると思われる。周溝内の堆積土は3層に大別され、自然堆積であり、中位に灰白色火山灰が認められた。



7号墳土層註記（①、②、③）

層　位	No.	土　色	土　性	備　考
周溝堆積土1層	1	10YR2/2　黒褐	粘土質シルト	
周溝堆積土2層	2	10YR5/4　にぶい黄褐	シルト	火山灰層。
周溝堆積土3層	3	10YR2/3　黒褐	粘土質シルト	火山灰若干含む。
	4	10YR3/4　暗褐	粘土質シルト	
	5	10YR3/3　暗褐	粘土質シルト	層上部に埴輪片を帯状に含む。
	6	10YR3/3　暗褐	粘土質シルト	マンガン粒多量に含む。
	7	10YR4/4　褐	シルト	地山ブロックを含む。

7号墳土層註記（④）

層　位	No.	土　色	土　性	備　考
周溝堆積土	1	10YR2/3　黒褐	シルト	
	2	10YR4/4　褐	シルト	層上面に埴輪片を含む。
	3	10YR3/3　暗褐	シルト	

第13図　7号墳

出土遺物（第14図～第16図・写真33～写真36）

周溝堆積土から埴輪片が約3600点(約38.4kg)、土師器片４点、剝片２点、鉄釘と考えられる破片が１点出土している。前回の調査時に西側部分から出土した遺物と合わせると、埴輪片約3800点(約42.4kg)、土師器片４点、剝片２点、鉄釘と考えられる破片２点が出土している。遺物の出土状況に偏在性は認められなかった。その他に周溝北東部から板状の石片が集中して出土した。図示したものは20点で、このうち朝顔形埴輪１点、円筒埴輪19点、土師器の高杯脚部１点である。

埴　　輪

６号墳同様に前回の基準に則して分類する。

第１次・２次調査で出土した埴輪は円筒埴輪のみで、５類に分類されたもののみであり、その他のものは確認されていない。

今回の調査では円筒埴輪と、前回の調査では確認されなかった朝顔形埴輪が確認された。大部分が円筒埴輪であり、朝顔形埴輪と判別できるものは少ない。６号墳同様に判別された点数以上に朝顔形埴輪が存在していたものと思われる。

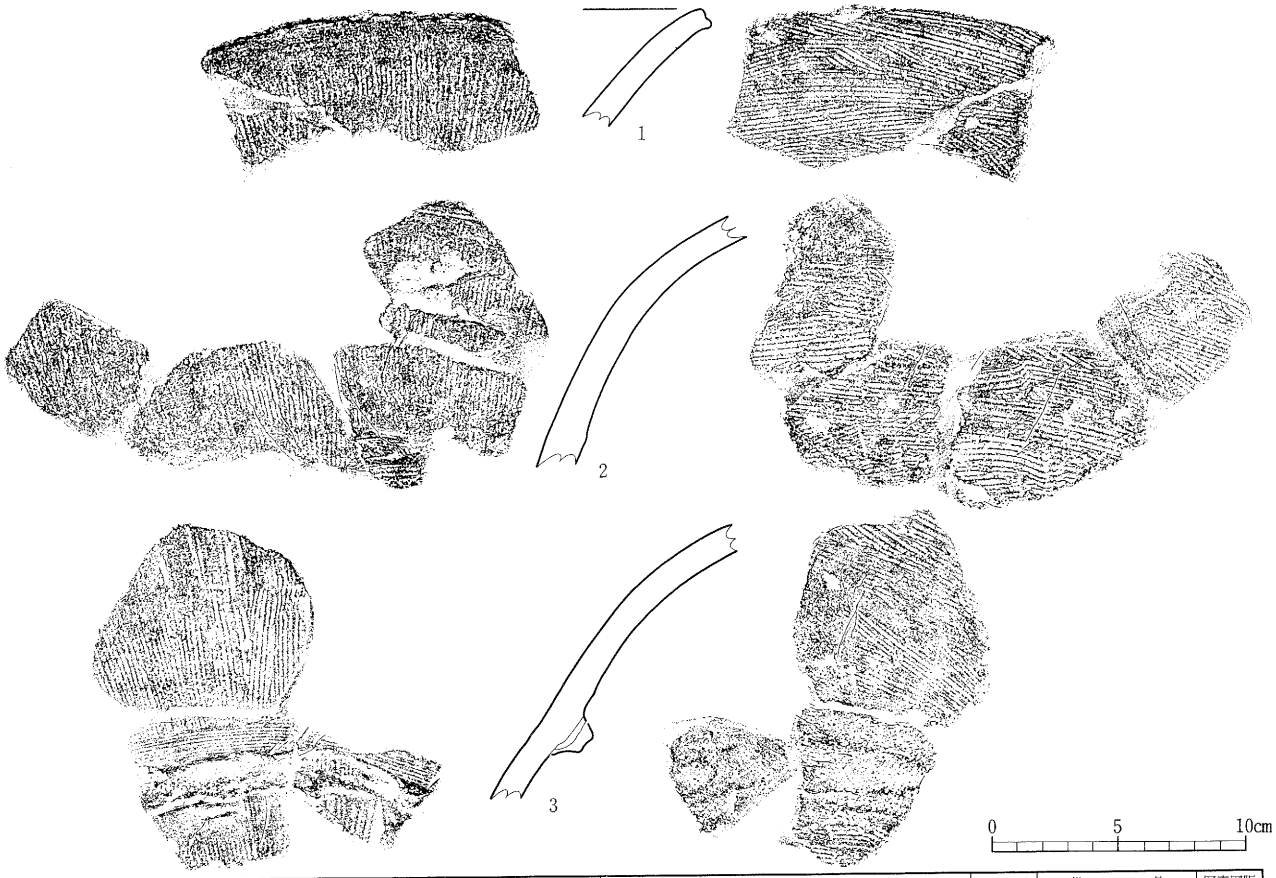
朝顔形埴輪（第14図１～３、第15図１～４）

図示したものは肩部から口縁部にかけての破片で、同一個体であると考えられるものである。肩部の張りは小さく、外面はタテハケのみで、内面は屈曲部以上がハケメで、以下は縦方向のナデである。円筒部は不明である。

円筒埴輪

５類（第15図５～７、第16図１）

全体の器形が復元できるものは無いが、外面が１次調整タテハケのみで、内面は３段目のみに斜めあるいは横方



No.	登録番号	種　別	層　位	外面調整・色調		内面調整・色調		スカシ孔	備　考	写真図版
1	S−37	朝顔形埴輪	周　溝	口縁部 ヨコナデ、屈曲部 タテハケ	7.5YR6/6	ハケメ(横)	7.5YR7/4		同一個体	34−1
2	S−31			タテハケ・ヨコナデ	7.5YR6/6	ハケメ(横)	7.5YR7/4			34−2
3	S−29			屈曲部 タテハケ、凸帯 ヨコナデ	7.5YR6/6	屈曲部 ハケメ(横)、凸帯部 ナデ(横)	7.5YR7/4			34−3

第14図　７号墳出土遺物 (1)

No.	登録番号	種別	層位	外面調整・色調		内面調整・色調		スカシ孔	備考	写真図版
1	S−32	朝顔形埴輪	周溝	頸部 タテハケ、凸帯 ヨコナデ	7.5YR6/6	ハケメ(横) ナデ(横)	7.5YR6/6		同一個体	
2	S−36			頸部 凸帯 ヨコナデ、肩部 タテハケ	7.5YR6/6	ナデ(縦)	7.5YR6/6			35−1
3	S−41			肩部 タテハケ、凸帯 ヨコナデ	7.5YR6/6	ナデ(斜・縦)	7.5YR6/6			35−2
4	S−33			円筒部 タテハケ、凸帯 ヨコナデ	7.5YR6/6	ナデ(縦)	7.5YR6/6			
5	S−42	円筒埴輪	周溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ	10YR7/6	ナデ(縦・横) ハケメ 弧線	10YR7/6	円形	5類	35−3
6	S−28	円筒埴輪	周溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ	7.5YR6/6	ハケメ(横) ナデ(縦) 沈線(横・斜)	7.5YR6/4	円形	5類	35−4
7	S−40	円筒埴輪	周溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ、凸帯 ヨコナデ	7.5YR6/6	ハケメ(縦) ナデ(横・縦)	7.5YR6/6	円形	5類	36−1
8	S−38	円筒埴輪	周溝	タテハケ、口縁部 ヨコナデ	5YR5/6	ハケメ(横) 弧線	5YR5/6			

第15図　7号墳出土遺物 (2)

No.	登録番号	種　別	層　位	外面調整・色調		内面調整・色調		スカシ孔	備　考	写真図版
1	S−35	円筒埴輪	周　溝	タテハケ・磨滅、凸帯 ヨコナデ	10YR6/4	ナデ(縦)	10YR6/6	円　形	5類	36−2
2	S−39	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、凸帯 ヨコナデ	5YR5/6	ナデ(縦)　ハケメ	5YR5/6	円　形		
3	S−44	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、凸帯 ヨコナデ	5YR6/8	ナデ(縦)	5YR6/8	円　形		
4	S−34	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、凸帯 ヨコナデ	7.5YR6/6	ナデ(縦)	7.5YR6/6	円　形	6類	36−3
5	S−27	円筒埴輪	堆積土	タテハケ、凸帯 ヨコナデ	7.5YR6/6	ナデ(縦)、凸帯部 ナデ(横)	7.5YR6/6			
6	S−30	円筒埴輪	周　溝	タテハケ、凸帯 ヨコナデ	7.5YR6/6	ナデ(縦)	7.5YR6/6		底面棒状圧痕	
7	S−45	円筒埴輪	周　溝	タテハケ	7.5YR6/8	ナデ(縦)	5YR6/6		底面棒状圧痕	36−4
8	S−43	円筒埴輪	周　溝	タテハケ	5YR5/6	ナデ(縦)	5YR6/8		底面棒状圧痕	36−5
9	C−12	高　坏	3　層	磨滅	5YR5/6		7.5YR5/3	——		36−6

第16図　7号墳出土遺物 (3)

向のハケメが施された後に縦方向のナデが施されるもの、縦方向のナデのみが施されるものがある。スカシ孔は円形である。内面にハケメが施されているものは、前回の基準にはないがその他の特徴からこの類とした。口縁部内面に弧状の短いヘラ描き沈線が見られるものがある（1～3、5）。

6類（第16図4）

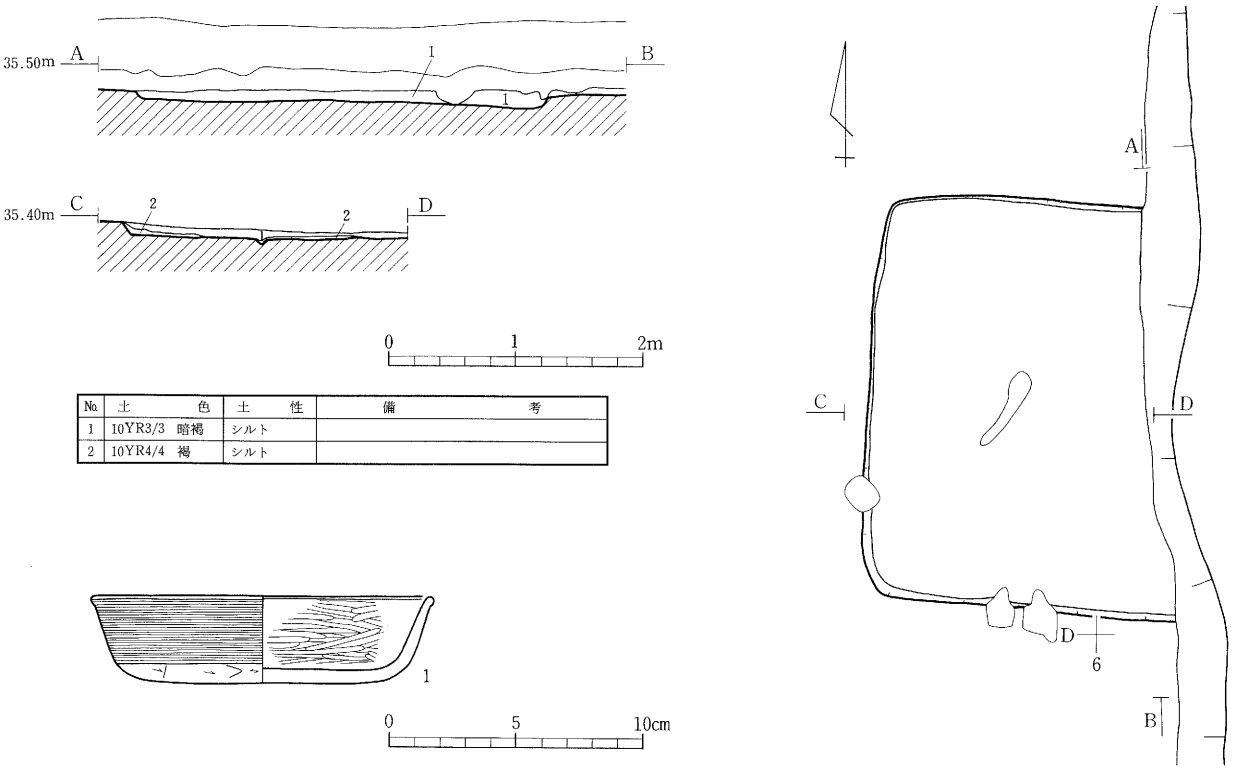
3段目が欠けているが、外面調整が1次タテハケのみで、内面が縦方向のナデでスカシ孔は円形である。3段目の下部以下の器形がごくわずかに内弯している。

2．　竪穴遺構・竪穴住居跡

SI－7竪穴遺構（第17図・写真14）

調査区東端部C－5・6区に位置し、基本層第4層上面で確認された。第2次調査時の試掘によって確認されたものであるが、その後の工事によって、遺構の東半部の上部に暗渠が設置され、調査区の範囲が限られてしまったため、今回の調査では遺構の西半部しか検出することが出来なかった。検出された部分では、他の遺構との重複はないが南側で倒木痕と重複し、これを切っている。遺構の全体を検出できなかったので、正確な平面形、規模は不明であるが、西辺2.98m、南辺2.4m以上の方形を基調とした平面形を呈するものと思われる。方向は西辺でN－3°－Eである。堆積土は2層に分けられる。壁高はもっとも保存の良い南壁で11cmである。底面から急角度で立ち上がる。底面は基本層第4層からなり、平坦であるが南側に向かって若干傾斜している。また、南側で倒木痕を切っていることから、不明瞭な部分もあった。遺構内部では、周溝・柱穴・炉・カマド等の施設は検出できなかった。試掘時にもカマド等の施設を思わせる焼土の分布などは見られなかった。これらの特徴から、竪穴住居跡ではなく竪穴遺構として扱うこととした。

出土遺物は極めて少なく、堆積土中及び床面から土師器片、礫が出土している。図示したものは土師器坏1点のみである。この坏は成形の際にロクロを使用していないもので、内面に黒色処理が施されている。



No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	
2	10YR4/4 褐	シルト	

No.	登録番号	種別	器種	層位	外面	内面	底部	備考	写真図版
1	C－1	土師器	坏	床面	ヨコナデ	ヘラミガキ・黒色処理	ケズリ		

第17図　SI－7竪穴住居跡・出土遺物

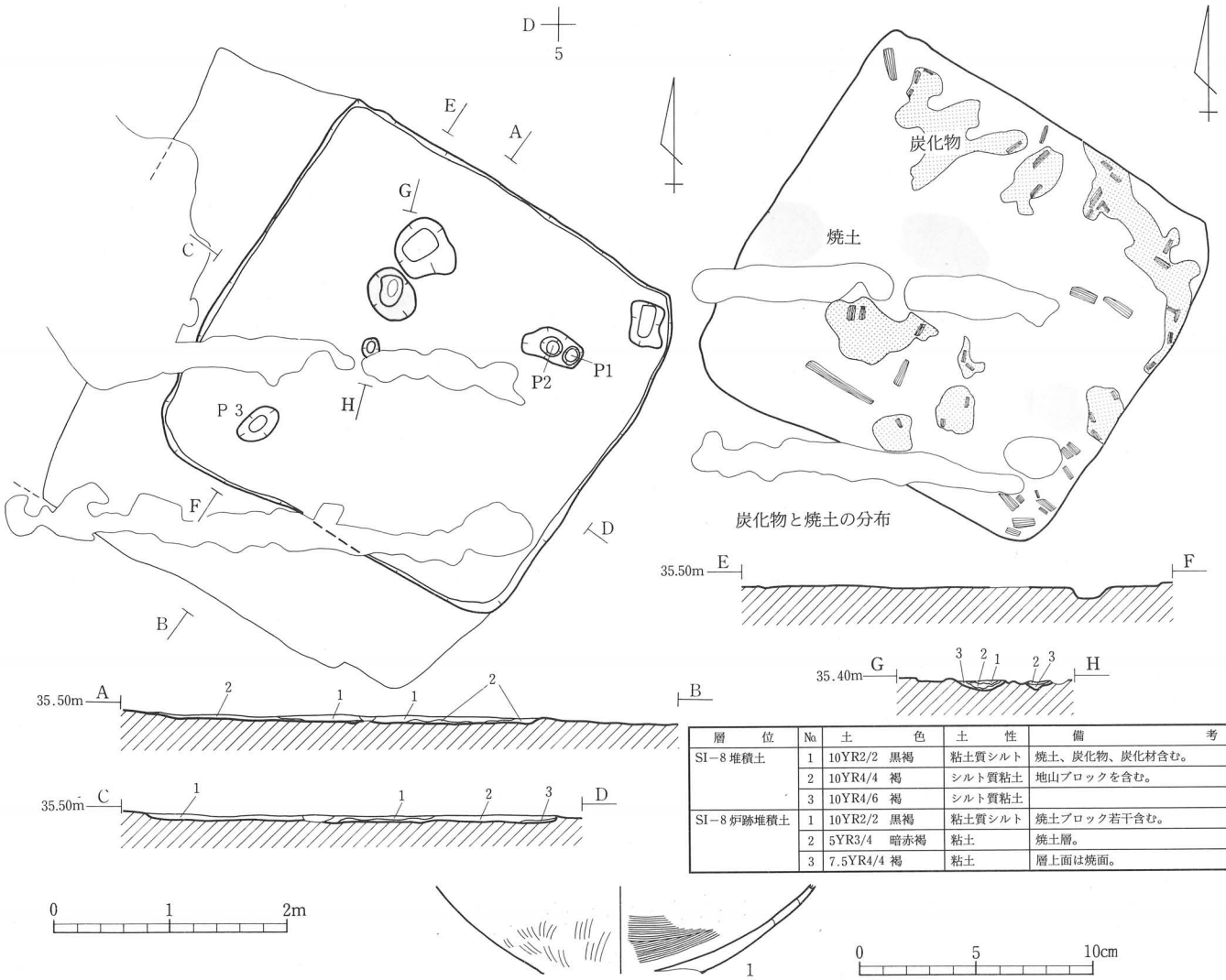
SI－8竪穴住居跡（第18図・写真15～写真16、写真36）

調査区中央やや南東寄りD－4・5区に位置し、基本層第4層上面で確認された。SI－10住居跡と重複関係にあり、SI－10住居跡を切っていることから本住居跡のほうが新しい。上部は削平され、耕作による攪乱もあり残存状況は非常に悪い。平面形、規模は不整な方形を呈し、北西辺で3.21m、北東辺で3.14mである。方向は西辺でN－30°－Eである。堆積土は3層に分けられ、焼土、炭化物を多量に含んでいる。壁は南及び西コーナー付近で僅かに高さ4cmのみ残存する。大部分床面から急角度で立ち上がるが、緩やかに立ち上がる部分も見られる。基本層第4層を直接床面としている。床面はほぼ平坦であるが、南側に向かって緩やかに傾斜している。周溝は検出されなかった。床面上でピットを4個検出したが、№1～3は何れも深さ10cm未満と浅く、柱穴であるか判断が難しい。また、P4は後述するように、本住居跡に切られているSI－10住居跡の柱穴と考えられる。床面中央部のやや北西寄りで47cm×40cmの楕円形を呈する炉が検出された。また、炉の南側に直径15cm程の小さな焼け面、北側に性格不明の直径約55cm、深さ約5cmの不整な円形を呈する凹み（土坑？）が検出された。更に東コーナー部分には40cm×30cm、深さ約5cmの不整な長方形を呈する浅い土坑が検出され、炭化材片が多数見られた。なお本住居跡は火災による焼失住居で焼土、炭化材が多量に検出されている（第18図）。炭化材の多くは、壁寄りに分布しており垂木材である可能性がある。

出土遺物は極めて少なく、床面及びピットから土師器片が出土している。図示したものは土師器高杯の坏部と考えられるもの1点のみである。

SI－8床面検出ピット（cm）

№	P－1	P－2	P－3
深さ	10.0	9.5	10.0



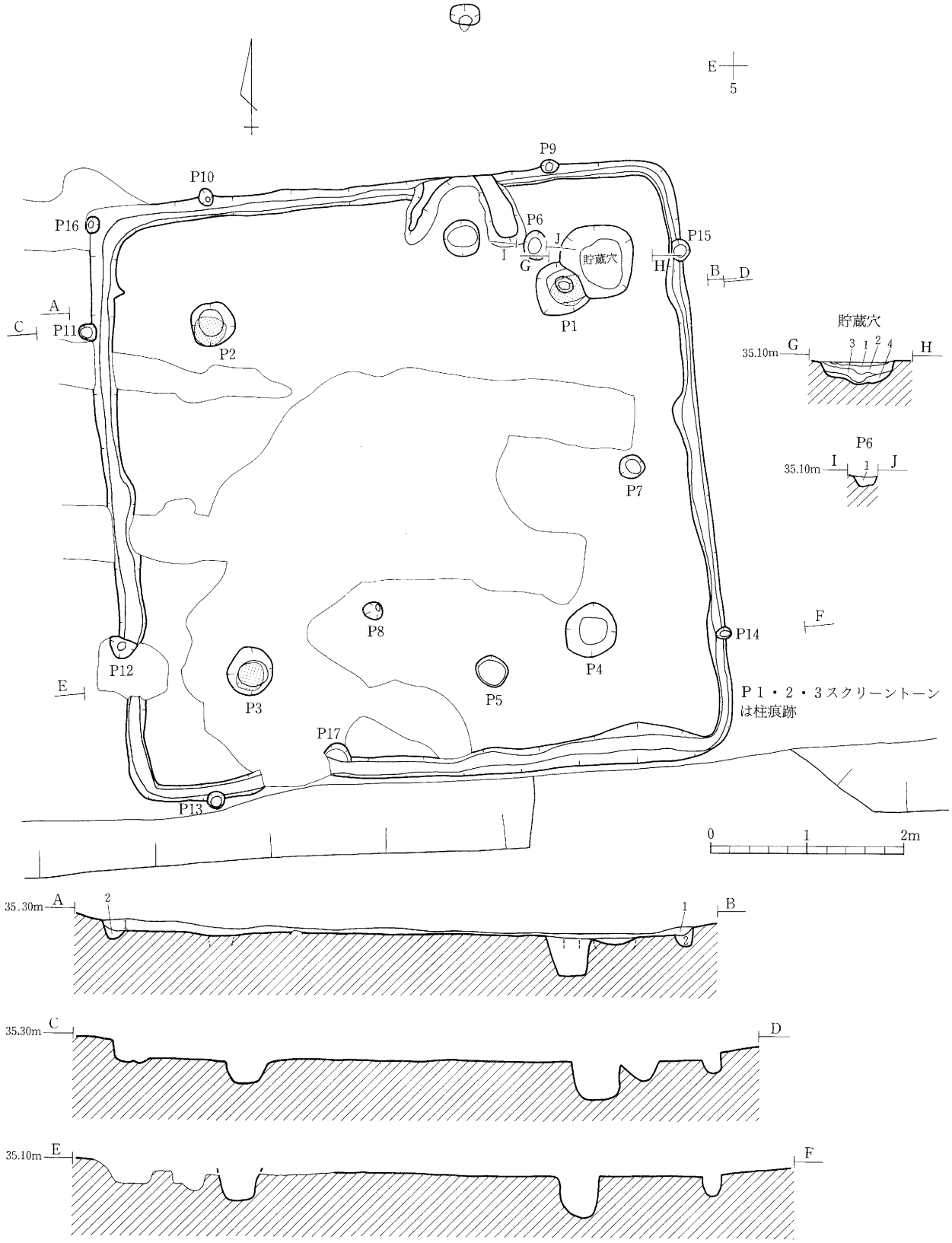
層位	№	土色	土性	備考
SI－8堆積土	1	10YR2/2 黒褐	粘土質シルト	焼土、炭化物、炭化材含む。
	2	10YR4/4 褐	シルト質粘土	地山ブロックを含む。
	3	10YR4/6 褐	シルト質粘土	
SI－8炉跡堆積土	1	10YR2/2 黒褐	粘土質シルト	焼土ブロック若干含む。
	2	5YR3/4 暗赤褐	粘土	焼土層。
	3	7.5YR4/4 褐	粘土	層上面は焼面。

№	登録番号	種別	器種	層位	外面	内面	底部	備考	写真図版
1	C－2	土師器	高坏	床面	ヘラミガキ	ヘラナデ			36－7

第18図　SI－8住居跡・出土遺物

SI－９竪穴住居跡（第19図～21図・写真18～写真22、写真37～写真39）

調査区南端部Ｅ－４区に位置し、基本層第４層上面で確認された。他の遺構との重複関係はない。上部は削平され、住居跡中央を中心に天地返し等による攪乱を受けている。規模、平面形は北辺5.92m、東辺6.05mの整形な方形を呈している。方向は東辺でＮ－6°－Ｗである。堆積土は２層に分けられる。壁高は、残存状況の良い北西コーナー付近で19.5cmである。基本層第４層を直接床面としているが、造り替えられた古い施設の埋土上部及び周辺部に貼

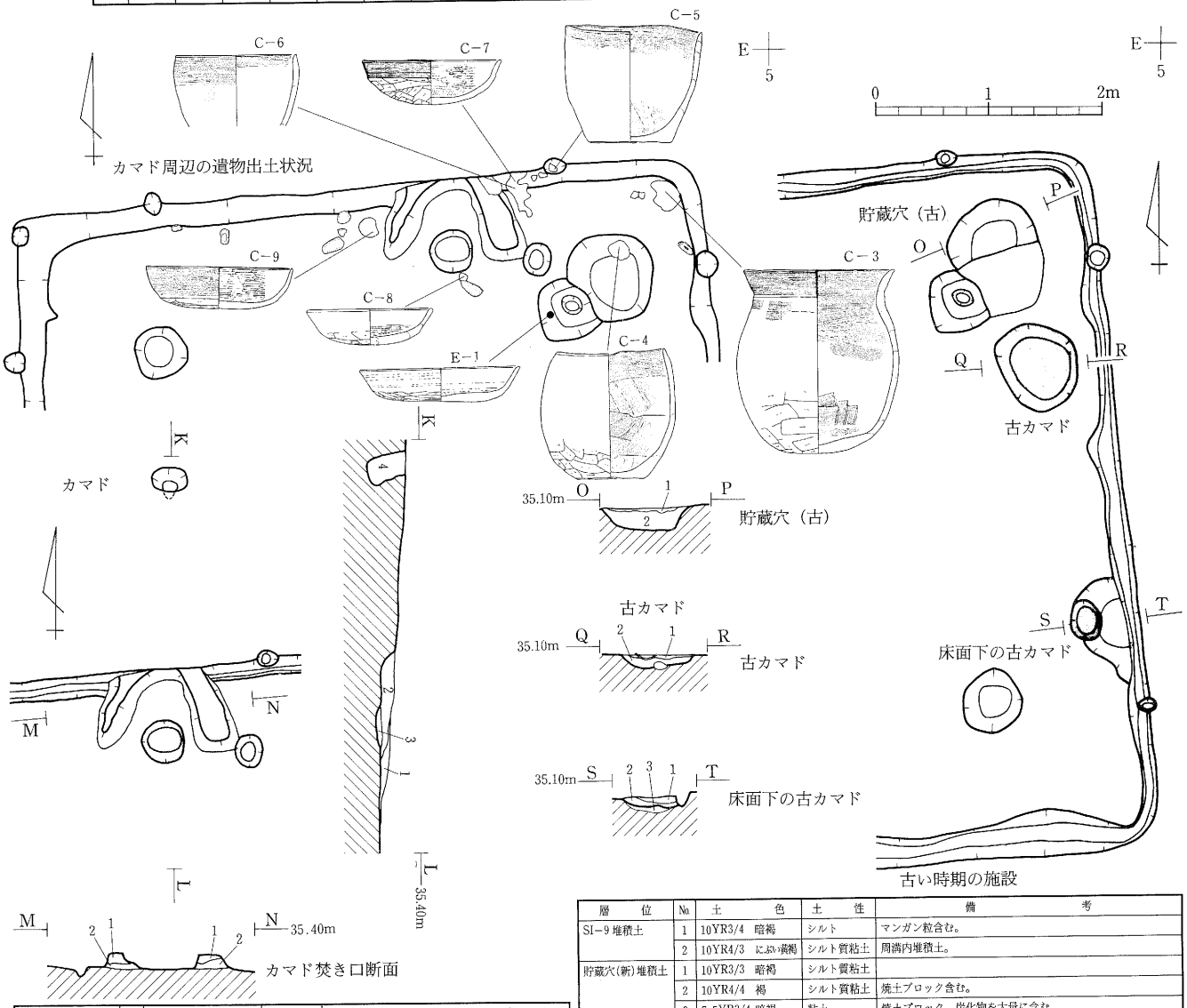


第19図　SI－９竪穴住居跡(1)

り床を施している部分が見られる。床面は平坦であるが、南側に緩やかに傾斜している。10cm前後の比高差が見られる。周溝は壁沿いに全周する。幅は12cm～30cmで、古いカマドの部分は幅が狭くなっている。床面からの深さは3.5cm～12.5cmあり、東辺、西辺の中央部付近が最も深くなっている。ピットは13個検出された。このうち、P 1～P 4は住居跡の対角線上にあり、主柱穴であると考えられる。いずれも比較的大きな掘り方を伴っている。P 1のみに柱痕跡が認められた。P 5には焼土ブロックや土器片が入っていた。P 6はカマド右袖脇にあり、焼土が充満していた。P 7～P13は壁柱穴と考えられ、住居跡各辺に主柱穴に対応するように2ヶ所づつ検出されているが、南壁は西側の1ヶ所のみであり、計7ヶ所になる。カマドは北壁やや東寄りに位置し、上部を削平されていることにより、残存状況は良くない。燃焼部は奥行き0.75m、幅0.9mで焚き口部に直径45cmの凹みがみられる。燃焼部右側の壁面は火熱のため焼けて赤変している。左壁は壁面が崩れて残ってはいないが内部は赤変している。煙道部は残存しないが、煙出しと考えられる、炭化物と焼土を含むピットを奥壁から1.55mの位置で検出した。また、東壁際で古いカマドの燃焼部と思われる部分を2ヶ所検出した。北側のものは80cm×60cmの楕円形で深さ14.5cm、南側のものは

SI－9検出ピット　(cm)

No	P－1	P－2	P－3	P－4	P－5	P－6	P－7	P－8	P－9	P－10	P－11	P－12	P－13	P－14	P－15	P－16	P－17
深さ	41.0	26.0	50.0	45.5	11.0	12.5	14.5	27.5	29.5	16.0	23.0	29.5	24.5	22.0	24.5	13.0	6.5



カマド焚き口断面

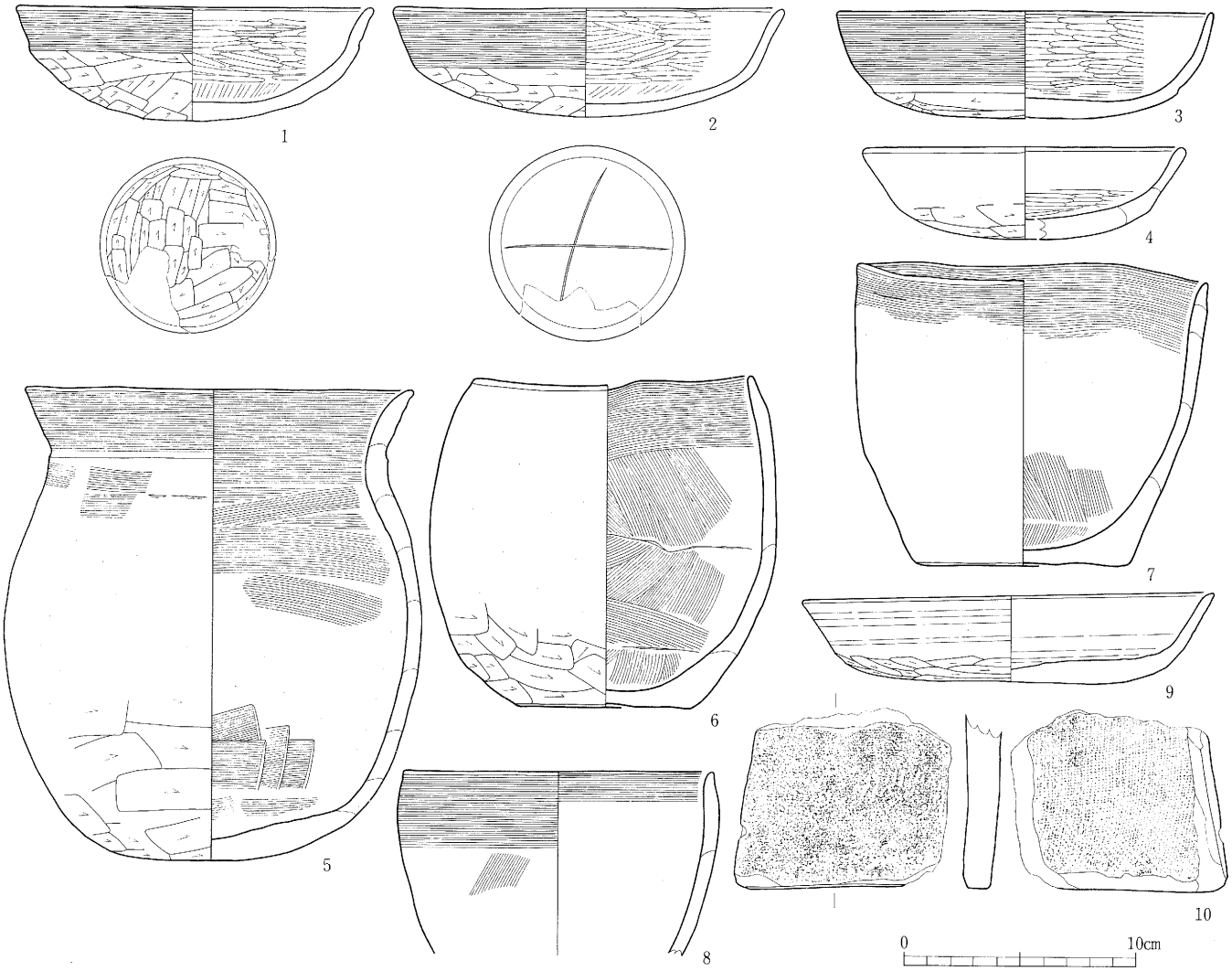
層　位	No	土　色	土　性	備　考
貯蔵穴（古）埋土	1	7.5YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロック混入（貼り床？）。
	2	5YR2/4　極暗赤褐	シルト	焼土と地山ブロックが混在。人為的堆積層。
床面上の古カマド焚き口	1	7.5YR3/4 暗褐	粘土	焼土小ブロック含む。
	2	5YR2/4　極暗赤褐	粘土	焼土をブロック状に含む。
床面下の古カマド焚き口	1	7.5YR3/3 暗褐	シルト	焼土ブロック、炭化物多量に含む。
	2	5YR4/3　褐	シルト	多量の地山ブロック、少量の炭化物含む。
	3			被熱赤変した地山？

層　位	No	土　色	土　性	備　考
SI－9堆積土	1	10YR3/4　暗褐	シルト	マンガン粒含む。
	2	10YR4/3　にぶい黄褐	シルト質粘土	周溝内堆積土。
貯蔵穴(新)堆積土	1	10YR3/3　暗褐	シルト質粘土	
	2	10YR4/4　褐	シルト質粘土	焼土ブロック含む。
	3	7.5YR3/4 暗褐	粘土	焼土ブロック、炭化物を大量に含む。
	4	10YR4/6　褐	シルト質粘土	
P 6	1	7.5YR3/3 暗褐	シルト	焼土ブロック多量に含む。
カマド内堆積土	1	10YR3/4　暗褐	粘土質シルト	
	2	5YR2/4　極暗赤褐	粘土	焼土ブロック、炭化物含む。
	3	5YR3/6　暗赤褐	シルト	焚き口の凹み中の焼土。
	4	10YR2/3　黒褐	粘土質シルト	炭化物及び僅かに焼土を含む。煙出し Pit。
カマド袖構築土	1	7.5YR4/4 褐	粘土質シルト	ローム質土。カマド内側は加熱を受けて赤変・硬化している
	2	7.5YR3/4 暗褐	シルト	カマド内側は加熱を受けて赤変・硬化している。

第20図　SI－9竪穴住居跡 (2)

100cm×50cmの半円形で深さは10cmで周溝まで広がっており、焚き口と思われる部分に35cm×27cmの楕円形の焼土の詰まった浅いピット状の凹みがある。何れも地山と見られる黄褐色系の土によって埋め立てられていた（第20図）。北側の燃焼部はかなり大きいことから、カマド自体も大型だった可能性が強い。逆に南側のものは規模が小さい。カマドの東側には貯蔵穴と考えられる78cm×75cmの不整な楕円形の土坑が検出された。Ｐ１と重複している。深さは23cmで、多量の焼土が含まれていた。この土坑に切られた直径約80cm、深さ23cmの土坑が検出された。古い貯蔵穴と考えられ、地山と見られる黄褐色系の土によって埋め立てられ、内部には焼土が含まれていた。古い貯蔵穴は東壁側の古いカマドに対応するものと考えられる。

出土遺物は、カマド周辺に集中し、土器の他に成形したと思われる粘土塊の焼けたものの破片や川原石も目についた（第20図）。Ｐ１とした主柱穴の掘り方検出面（床面）に須恵器坏が出土したほか、Ｐ４の南側埋土中からは瓦が出土した。図示したものは土師器坏４点、甕４点、須恵器坏１点、瓦１点である。土師器はいずれも成形の際にロクロを使用していないものである。瓦は丸瓦で凹面に布目、凸面になでが見られる。



No.	登録番号	種別	器種	層位	外面	内面	底部	備考	写真図版
1	C−10	土師器	坏	1 層	ヨコナデ　体部～底部－ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラミガキ・黒色処理	丸底		38－1
2	C−7	土師器	坏	床面	ヨコナデ　体部～底部－ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理		底部外面に十字の刻み	38－2
3	C−9	土師器	坏	床面	ヨコナデ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ		38－3
4	C−8	土師器	坏	床面	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	口縁部マメツ	38－4
5	C−3	土師器	甕	床面	口縁部－ヨコナデ　体部－ヘラナデ・ヘラケズリ	口縁部－ヨコナデ　体部－ナデ・ヘラナデ	ナ　デ		39－1
6	C−4	土師器	甕	貯蔵穴(新)1層	口縁部－剝落　体部－ヘラケズリ	口縁部－ヨコナデ　体部－ナデ	ヘラケズリ・木葉痕		39－2
7	C−5	土師器	甕	Pit 9	口縁部－ヨコナデ　体部－剝落	口縁部－ヨコナデ　体部－ナデ	木葉痕		39－3
8	C−6	土師器	甕	床面	口縁部－ヨコナデ　体部－ヘラナデ	口縁部－ヨコナデ			
9	E−1	須恵器	坏	Pit 1	ロクロ調整・体部下端手持ヘラケズリ	ロクロ	手持ヘラケズリ		38－5
10	F−1	丸　瓦		Pit 4	ナデ	布目・側面付近ヘラケズリ			

第21図　SI－9 竪穴住居跡出土遺物

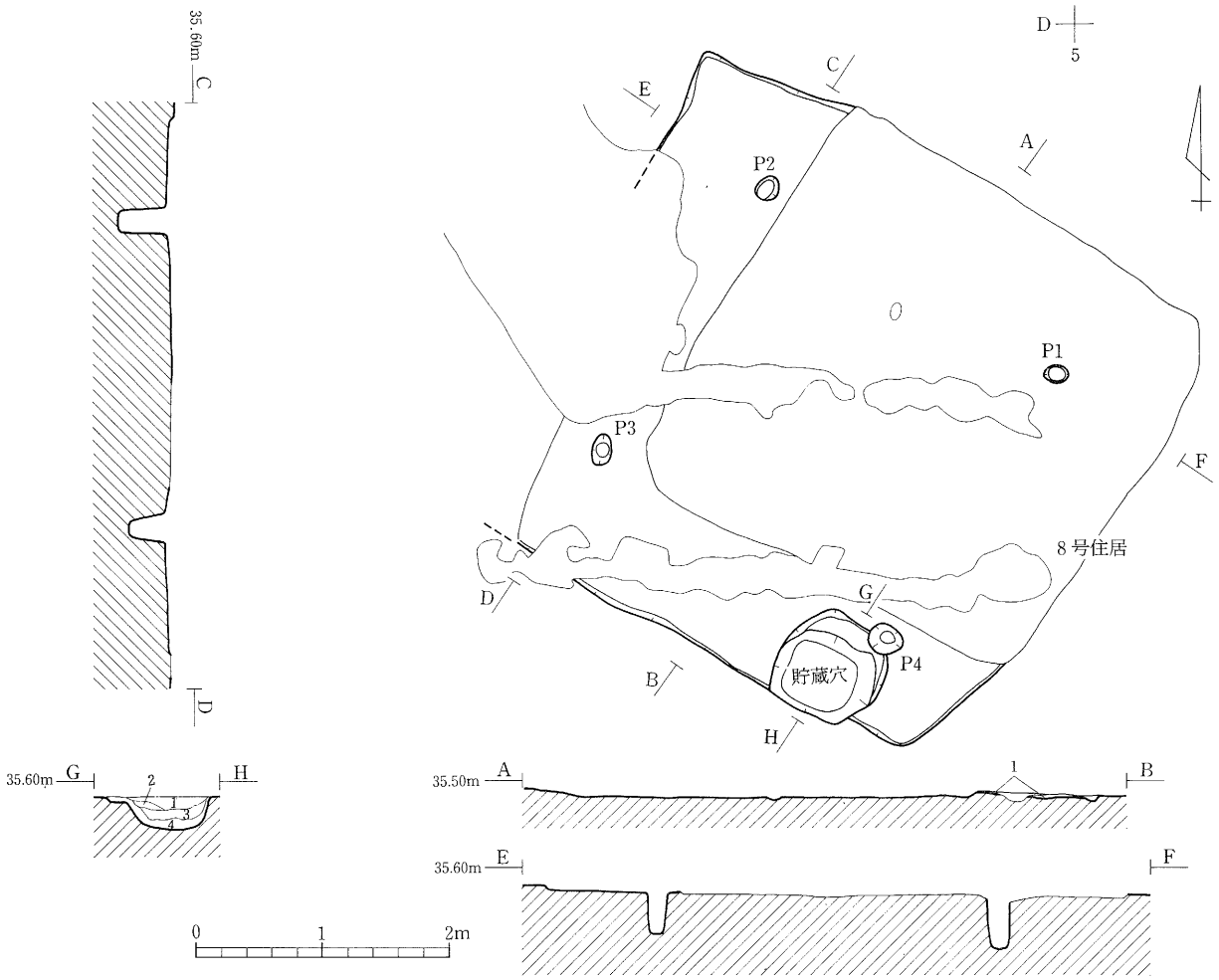
SI－10 竪穴住居跡（第22図・写真15、写真17）

調査区中央やや南東寄りD－4・5区に位置し、基本層第4層上面で確認された。SI－8住居跡と重複しており、SI－8住居跡に切られていることから本住居跡の方が古い。また、倒木痕や畑の耕作痕によって攪乱を受け、さらに削平も著しい。重複や攪乱、プランが明確でないところもあり、正確な規模、平面形は不明であるが、一辺約4 m前後の方形を基調とした平面形を呈する。方向は南西辺でW－30°－Nである。堆積土は単層であり、多量の炭化物を含んでいる。壁高は僅かに2～3cm残存しているにすぎない。床面から緩やかな角度で立ち上がる部分が多い。床面は基本層第4層から成り、平坦であるが南側に向かって緩やかに傾斜している。周溝は検出されなかった。ピットは3個(No.4～7)検出され、深さは30～43cmあり、いずれも主柱穴と考えられる。また、SI－8住居跡のP 4は深さが43cmあり、位置的にも住居跡の対角線上にあり、本住居跡の主柱穴であると思われる。炉やカマドは検出されなかった。また、南西壁の南コーナー寄りに90cm×80cmの楕円形で、浅い部分もあるが、深さ27cm程の土坑が検出され、貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は極めて少量であるが、貯蔵穴を中心に土師器や弥生土器の細片、礫石器の破片が出土している。何れも図示できるものはないが、土師器は成形の際にロクロを使用していないものである。

SI－10 検出ピット　(cm)

No.	P－1	P－2	P－3	P－4
深さ	43.0	33.0	30.0	40.0



層位	No.	土色	土性	備考
SI－10 貯蔵穴堆積土	1	10YR2/3 黒褐	シルト質粘土	焼土僅かに、炭化物片全体に含む。
	2	5YR3/2 暗赤褐	シルト質粘土	焼土ブロック多量に含む。
	3	7.5YR3/2黒褐	粘土質シルト	焼土層No.1より大きなブロックで、炭化物片層No.1より少量含。
	4	7.5YR2/3極暗褐	粘土	炭化物片、地山小ブロック僅かに含む。

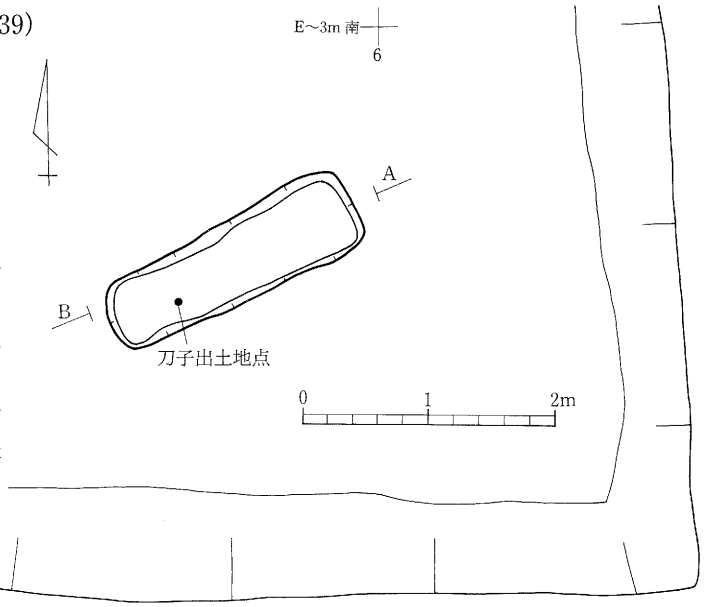
層位	No.	土色	土性	備考
SI－10 堆積土	1	10YR3/3 暗褐	シルト	多量の炭化物含む。

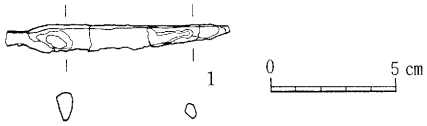
第22図　SI－10 竪穴住居跡

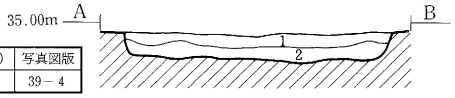
3．土坑・溝跡

SK－35 土坑(第23図・写真23～写真24、写真39)

調査区南東隅E－５区に位置し、基本層第４層上面で確認された。他の遺構との重複はない。平面形は長方形で、規模は長軸2.12m、単軸0.73m、長軸方向はN－64°－Eである。上部は削平を受け、浅くなっているものと考えられるが、深さは27cmである。埋土は２層に分けられるが、人為的な堆積土と思われる。壁は底面から急角度で立ち上がっている。底面は小さい凸凹はあるが、ほぼ平坦である。遺物は西側埋土中より刀子と思われる鉄製品が出土している。







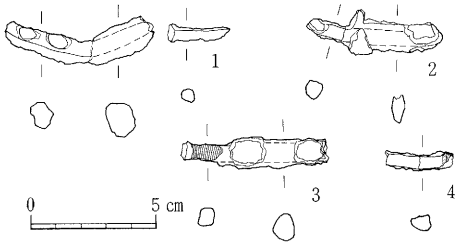
No.	登録番号	種　別	層　位	長さmm	幅　mm	厚さmm	重量(g)	写真図版
1	N－1	刀子	2層	(88.0)	11.0	5.8	(6.5)	39－4

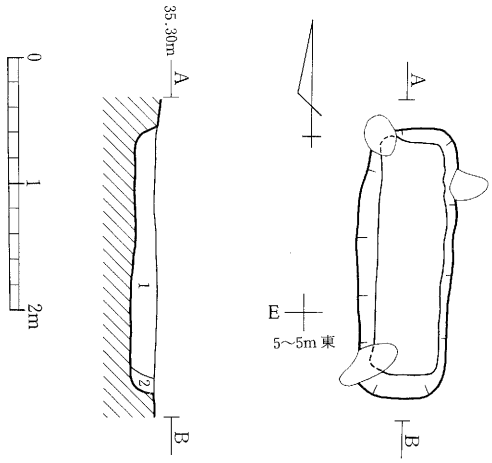
No.	土　　色	土　性
1	10YR3/4　暗褐	粘土質シルト
2	10YR4/6　褐	粘土質シルト

第23図　SK－35 土坑・出土遺物

SK－36 土坑（第24図・写真25～写真26、写真39）

調査区南東寄りD・E－５区に位置し、基本層第４層上面で確認された。他の遺構との重複はないが、３ヶ所で攪乱を受けている。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.14m、単軸0.77m、長軸方向はN－2°－Eである。上部は削平を受け、浅くなっているものと考えられるが、深さは21cmである。埋土は２層に分けられるが、人為的な堆積土と思われる。底面はほぼ平坦であるが、南側に向かって若干の傾斜がみられる。遺構検出面よりやや下がった埋土中で、壁面に沿うように釘と思われる鉄製品５点が出土している。このうち４点を図示した。





No.	登録番号	種別	層位	長さmm	幅　mm	厚さmm	重量(g)	写真図版
1	N－2	釘	1層	(59.0)	10.0	13.0	(11.6)	39－5
2	N－3	釘	1層	(54.0)	6.5	5.7	(5.6)	39－6
3	N－4	釘	1層	(59.0)	12.0	8.1	(9.4)	39－7
4	N－5	釘	1層	(23.0)	7.0	6.5	(2.0)	39－8

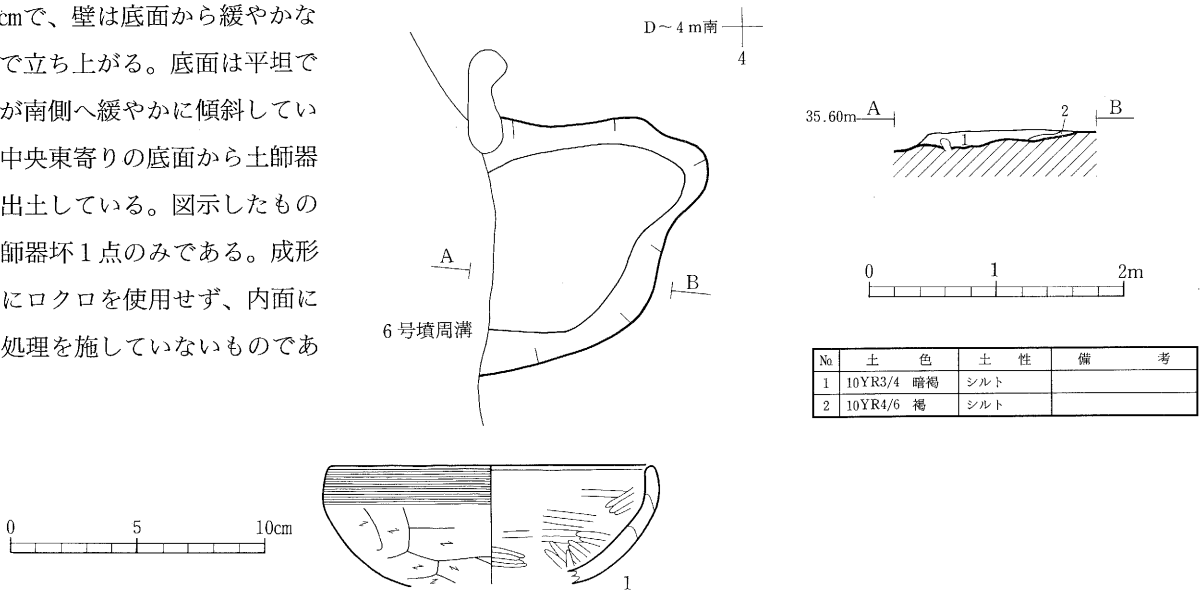
No.	土　　色	土　性	備　　考
1	10YR3/4　暗褐	粘土質シルト	
2	10YR4/4　褐	粘土質シルト	地山ブロック含む。

第24図　SK－36 土坑・出土遺物

SK－37 土坑（第25図）

調査区中央部D－３区に位置し、基本層第４層上面で確認された。６号墳周溝と重複関係にあり、周溝に切られていることから、本遺構が６号墳よりも古い。また、一部攪乱を受けている。６号墳の周溝に切られていることから、全体の平面形、規模は不明であるが、不整形で、2.01m×1.71m以上である。堆積土は２層に分けられる。深さ

は10cmで、壁は底面から緩やかな角度で立ち上がる。底面は平坦であるが南側へ緩やかに傾斜している。中央東寄りの底面から土師器片が出土している。図示したものは土師器坏１点のみである。成形の際にロクロを使用せず、内面に黒色処理を施していないものである。



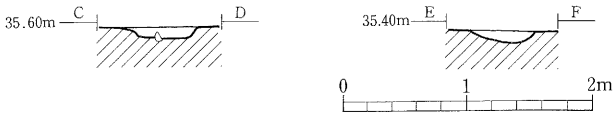
No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/4　暗褐	シルト	
2	10YR4/6　褐	シルト	

No.	登録番号	種　別	器　種	層　位	外　面	内　面	底　部	備　考	写真図版
1	C－11	土師器	坏		ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ		口縁近くはマメツ	39－9

第25図　SK－37 土坑・出土遺物

SD－３溝跡（第４図、第26図・写真27）

調査区中央部に位置し、調査区を斜めに横切るように延びている。基本層第４層上面で確認された。前回の調査のSD－３溝跡と同一の溝跡である。前回の調査区では、古墳や土坑との重複関係が認められたが、今回の調査区では他の遺構との重複はない。



No	土　色	土　性	備　考
1	10YR2/3　黒褐	シルト	地山小ブロックを霜降り状に含む。

第26図　SD－３土層断面図

攪乱や削平を受けており、特に北部で著しく、一部では削平のため溝が途切れている部分がある。南北方向の溝跡で、途切れた部分も含めると約33m にわたって検出された。幅は67cm、深さは14.5cm、断面形は皿形を呈している。調査区北壁では、溝幅136cmと、広くなっている。地形の傾斜に沿って、緩やかに南側に下っている。溝跡は若干弧状を呈し、方向はおよそ N－12°～20°－W である。出土遺物はなく、前回の調査では、表土直下で検出されていることから、新しい時期の溝であると考えられており、今回の調査でも同様である。

Ⅴ．まとめ

今回の調査で検出された遺構は古墳の周溝２基、竪穴住居跡３軒、竪穴遺構１基、土坑３基、溝跡１条である。前回の調査成果と合わせると古墳10基、竪穴住居跡９軒、竪穴遺構１基、土坑37基、溝跡６条である（第27図）。

出土した遺物は埴輪、土師器、須恵器、土製品、石器、石製品、鉄製品などがある。

遺物については、前回の調査と同様に埴輪の出土量が最も多く、その他の遺物は少量である。ここでは、前回の調査の成果に新たに加えるべき事項について述べておきたい。

１．古　　墳

古墳は６号墳、７号墳の２基が検出された。６号墳は本遺跡で検出された古墳のなかでは11号墳に次ぐ規模である。出土した埴輪には朝顔形埴輪と円筒埴輪がある。朝顔形埴輪は円筒部が３段のものであり、３段目に半円形のスカシ孔、２段目に90°ずれた位置に小孔が穿たれているものである。円筒埴輪は3c 類、4b 類、4c 類、５類がある。前回の調査では細別分類はできないが、３類と２か３類、５か６類と考えられる埴輪があるとされている。今回の

調査結果から２か３類とされていたものは３類、５か６類とされていたものは５類であることが考えられる。これらのことから６号墳には五反田古墳系列と富沢窯跡系列の埴輪が伴っていたことが明らかになった。

７号墳は本遺跡で検出された古墳のなかで最も小規模のものである。周溝の底面には多くの起伏が見られ、その成因として周溝掘削の作業単位を表している可能性がある。前回の調査では５類の円筒埴輪のみが確認されていたが今回の調査では朝顔形埴輪と円筒埴輪が出土している。朝顔形埴輪は破片のみで詳細は不明である。円筒埴輪は５類と６類がある。これらは富沢窯跡系列と考えられるものである。

以上のことから６号墳は11号墳とともに五反田古墳系列と富沢古墳系列の両者の埴輪を持つグループに、７号墳は１・２・４・10号墳とともに富沢窯跡系列の埴輪を持つグループにまとめられる。

６号墳、７号墳の編年的な位置づけは、前回の調査の報告では７号墳は大野田１号墳段階に位置づけ、６号墳は大野田１号墳段階の可能性を指摘していた。今回の調査成果から６号墳と７号墳の出土埴輪を比較すると、朝顔形埴輪の肩部の形態や調整、円筒埴輪の口縁部形態や凸帯の高さ、基部の厚さなどに違いがあり、６号墳が７号墳よりやや古い様相が見られる。このことから６号墳は前回の報告よりやや古く大野田２号墳段階に近い段階に位置づけられ、７号墳は前回の報告通り大野田１号墳段階に位置づけられる。

２．竪穴住居跡・竪穴遺構

竪穴住居跡はSI－８～10まで３軒検出した。SI－８と10は重複しているが、SI－８が新しい。SI－８から高杯が出土しており前回の調査のSI－１・２・３・６と同様に塩釜式期と思われる。SI－10は土師器片や弥生土器片が出土しているが時期が判るものはみられず、塩釜式以前としかいえない。SI－９は住居跡にカマドが付設され、出土した土師器は成形に際してロクロを使用していないもので、坏の内面に黒色処理が施され、外面には段が観察されるものがある。これらは国分寺下層式期のものであると思われる。

竪穴遺構はSI－７の１基である。出土した土器は成形に際してロクロを使用していない土師器で、内面に黒色処理が施され、平底である。国分寺下層式期のものであると思われる。

３．土　　坑

３基検出された。SK－35･36はその形態が前回の調査で土壙墓とされたものに類似しており、鉄製刀子や鉄釘が出土していることから土壙墓と考えられる。またSK－36は鉄釘が出土していることから木棺墓であった可能性がある。前回の調査同様平安時代のものと思われる。またSK－37は６号墳周溝と重複しており、それに切られていることから６号墳より古いものである。

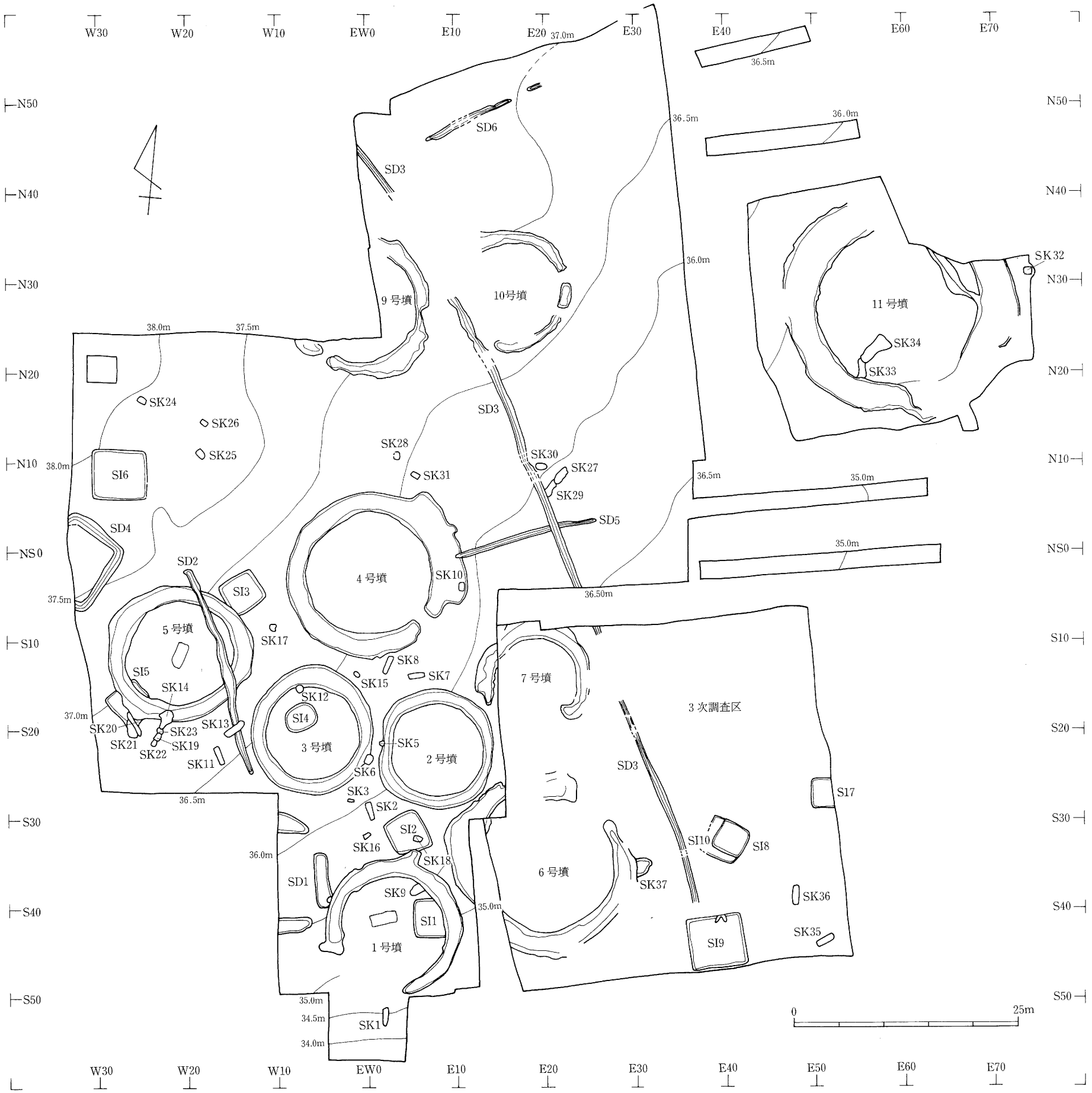
引用・参考文献

氏家和典　1957：「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

藤沢　敦　1992：「円筒埴輪　東北」『古墳時代の研究９　古墳Ⅲ　埴輪』雄山閣

結城真一・藤沢敦：1987　『大野田古墳群　春日社古墳・鳥居塚古墳　発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第108集　仙台市教育委員会

平間亮輔　1998：『原遺跡－第１・２次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第229集　仙台市教育委員会


W30
W20
W10
EW0
E10
E20
E30
E40
E50
E60
E70
N50
N40
N30
N20
N10
NS0
S10
S20
S30
S40
S50
SD6
SD3
9 号墳
10号墳
11 号墳
SK32
SK34
SK33
SK24
SK26
SK25
SI6
SK28
SK31
SK30
SK27
SK29
SD5
SD4
SD2
SI3
4 号墳
SK10
5 号墳
SK17
SI5
SK14
SK8
SK15
SK7
SK12
SI4
3 号墳
SK20
SK21
SK22
SK23
SK19
SK13
SK11
SK5
2 号墳
SK6
SK3
SK2
SI2
SK16
SK18
SD1
SK9
SI1
1 号墳
SK1
7 号墳
3 次調査区
SD3
SI10
SI8
6 号墳
SK37
SK36
SK35
SI9
S17
37.0m
36.5m
36.0m
35.0m
36.50m
38.0m
37.5m
34.5m
34.0m
0
25m

第27図　遺構全体図

写　真　図　版

写真１　遺跡周辺航空写真（1961）

写真２　調査区全景（東→）

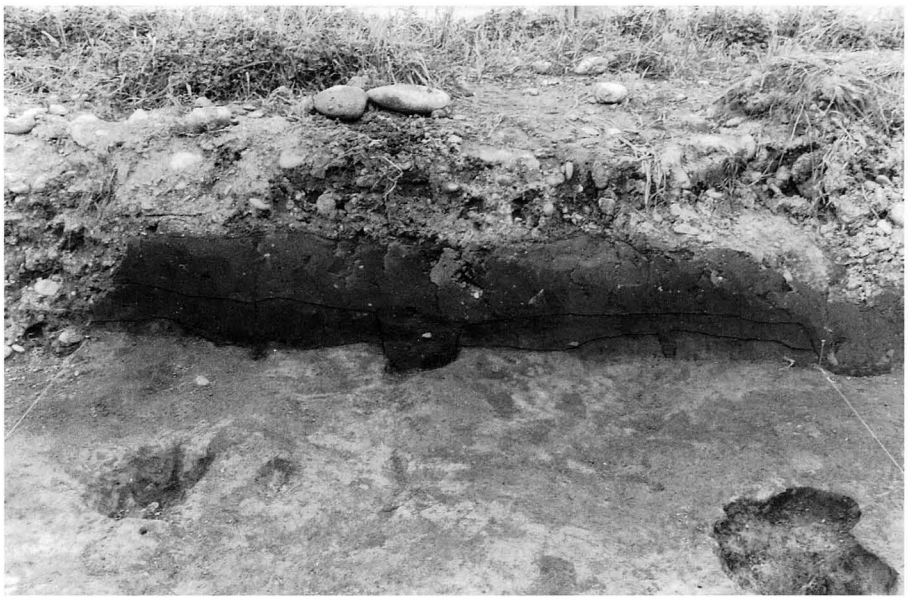


写真３　調査区北壁土層断面（南→）

写真４　６号墳完掘状況（東→）

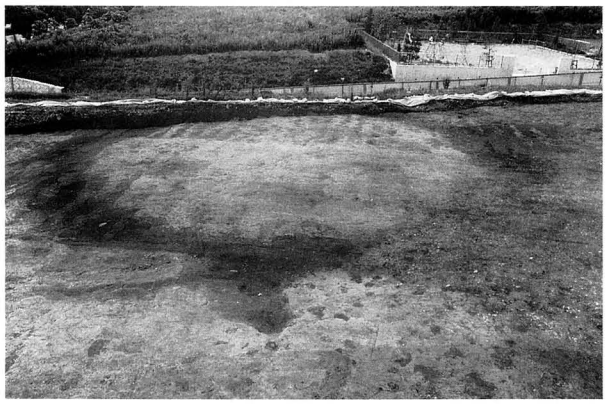


写真５　６号墳確認状況（東→）

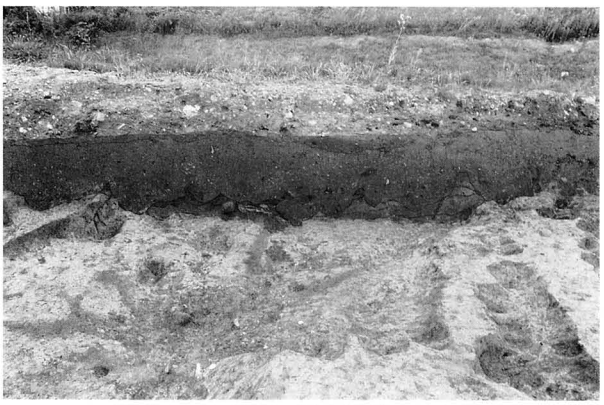


写真６　６号墳西側土層断面（東→）

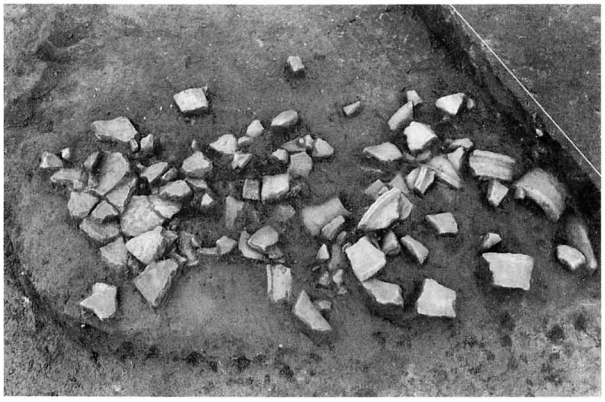


写真７　６号墳埴輪出土状況（南東→）

写真８　６号墳南東部礫出土状況（南西→）

写真９　７号墳完掘状況（東→）

写真10　７号墳確認状況（南→）

写真11　７号墳北東部埴輪出土状況（南東→）

写真12　７号墳周溝土層断面②（西→）

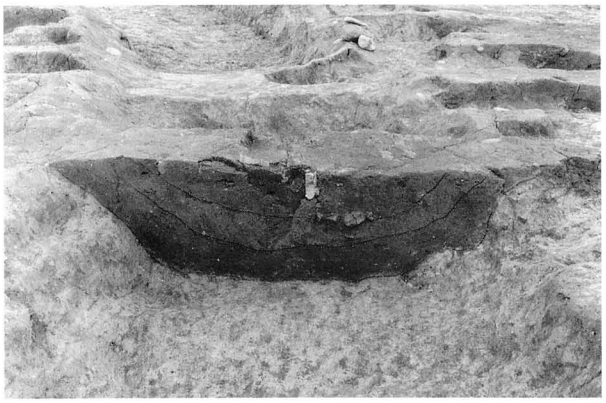


写真13　７号墳周溝土層断面④（南→）

写真14　SI－7土層断面（南→）

写真15　SI－8・10完掘状況（南→）

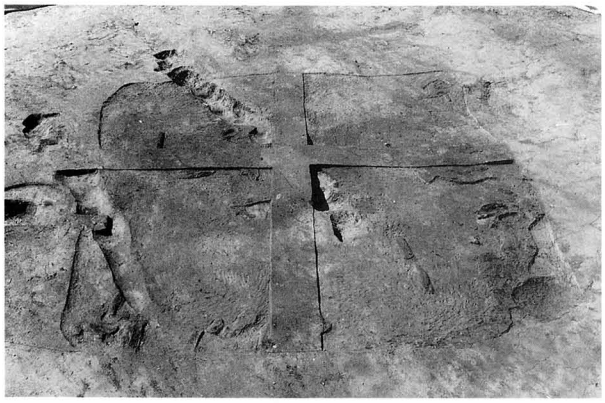


写真16　SI－8炭化物・焼土検出状況（東→）

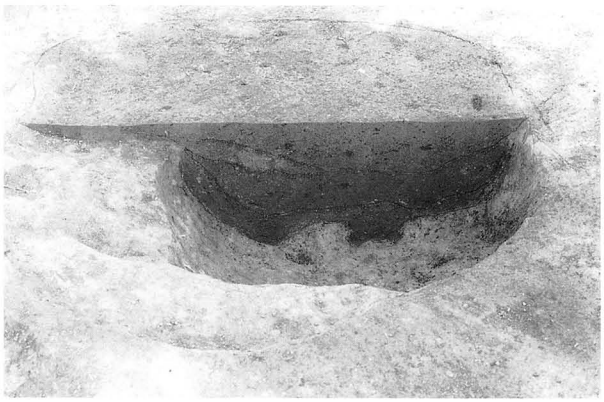


写真17　SI－10貯蔵穴土層断面（西→）

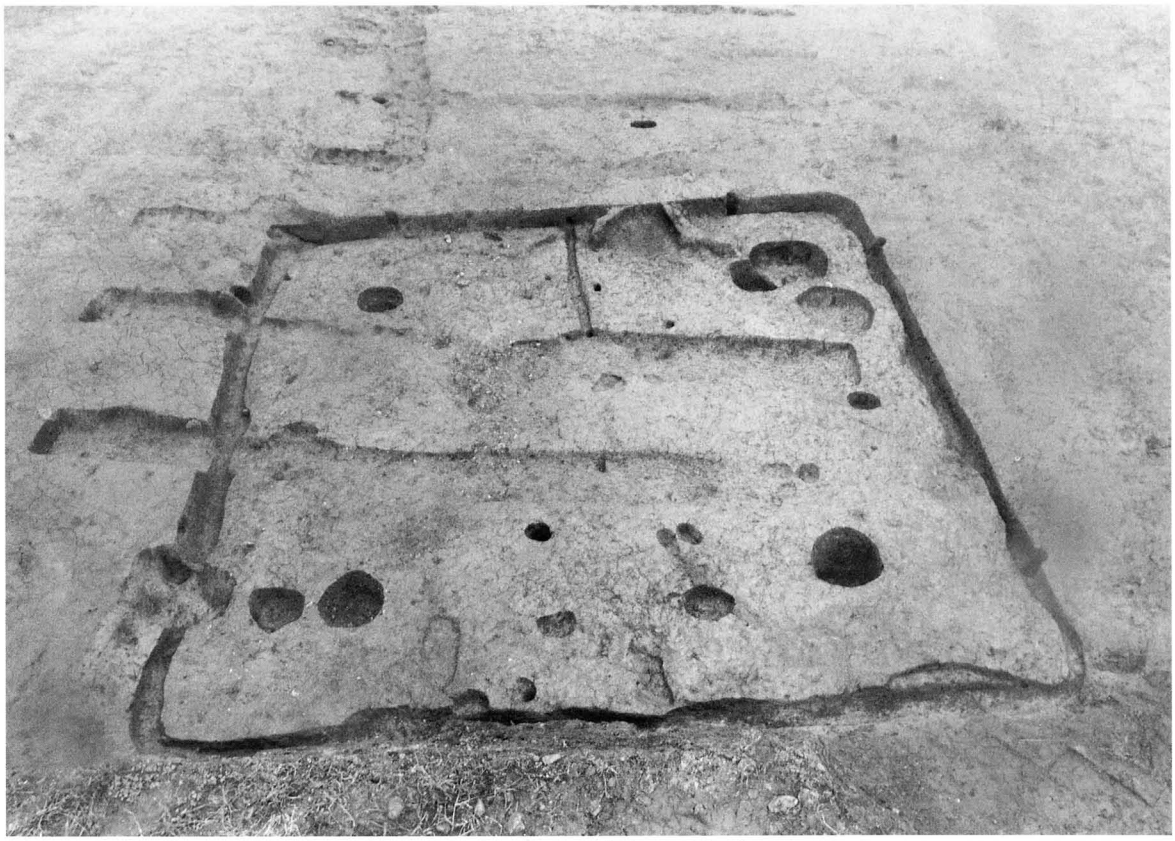


写真18　SI－9完掘状況（南→）

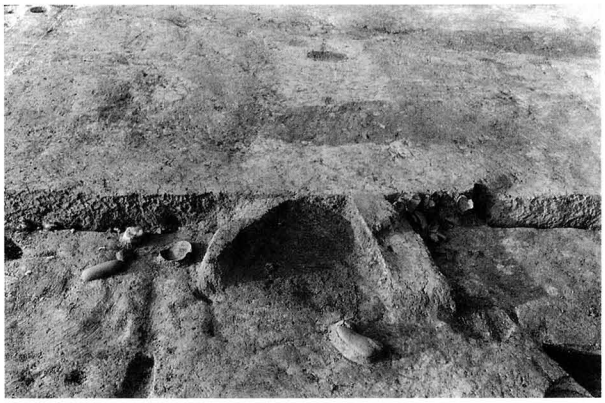


写真19　SI－9カマド全景（南→）

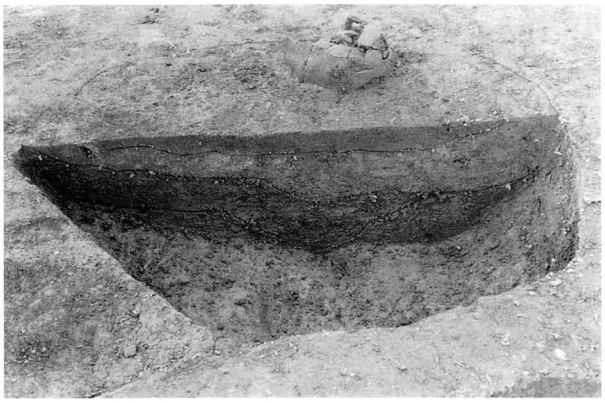


写真20　SI－9貯蔵穴（新）土層断面

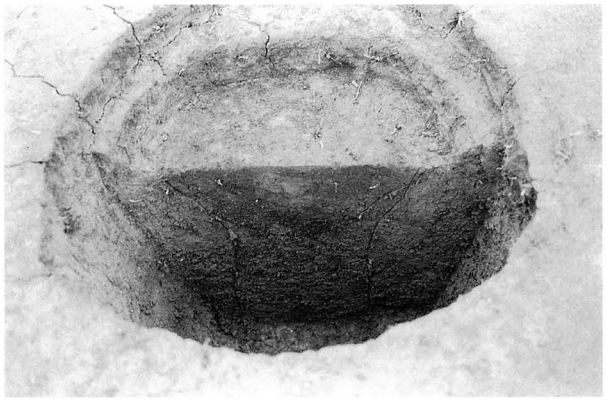


写真21　SI－9　P4土層断面（南→）

写真22　SI－9床面土師器出土状況（南→）

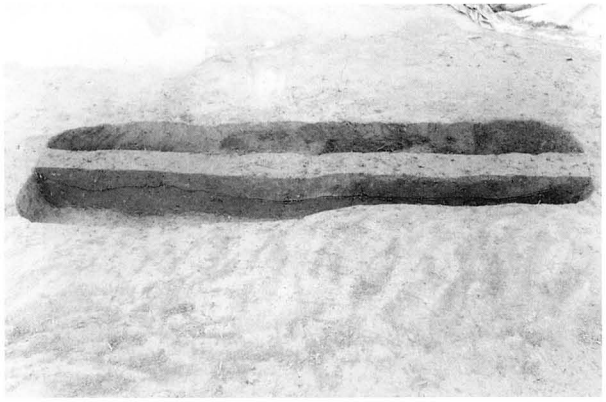


写真23　SK－35土層断面（北→）

写真24　SK－35刀子出土状況（南→）

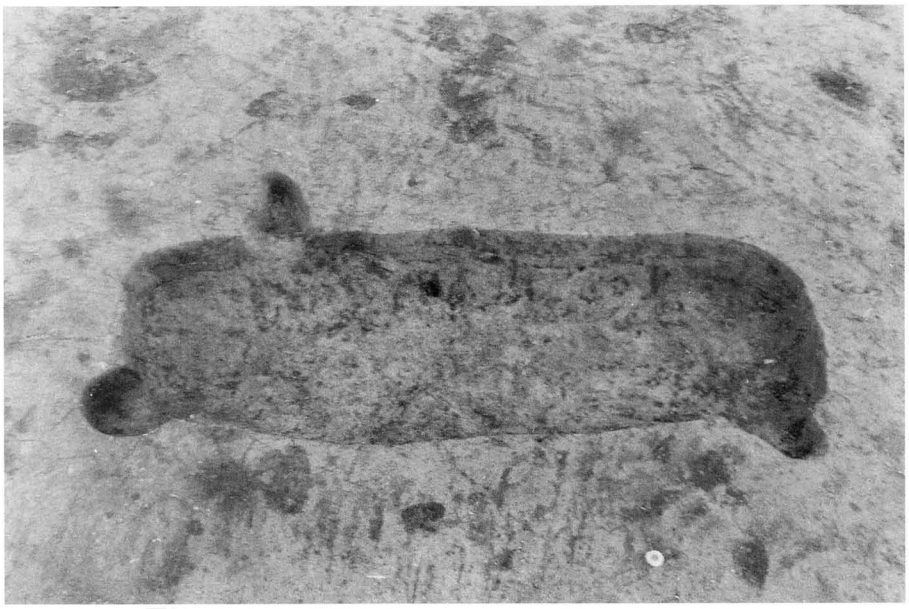


写真25　SK－36完掘状況（西→）

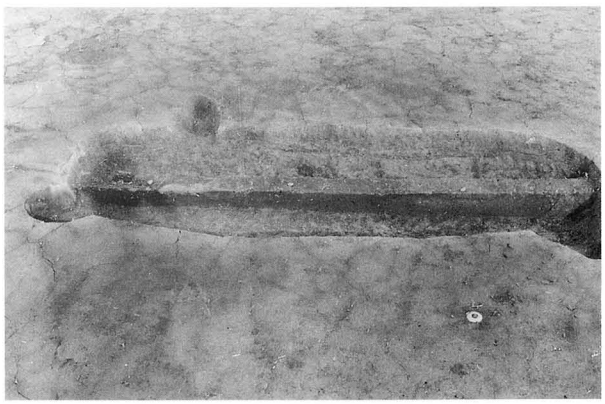


写真26　SK－36土層断面（西→）

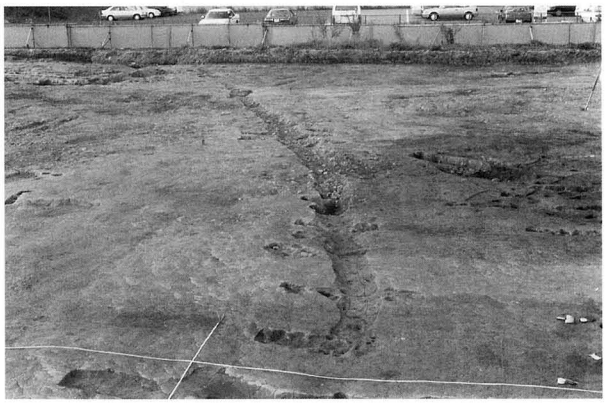


写真27　SD－3完掘状況（南→）

写真28　6号墳出土遺物(1)

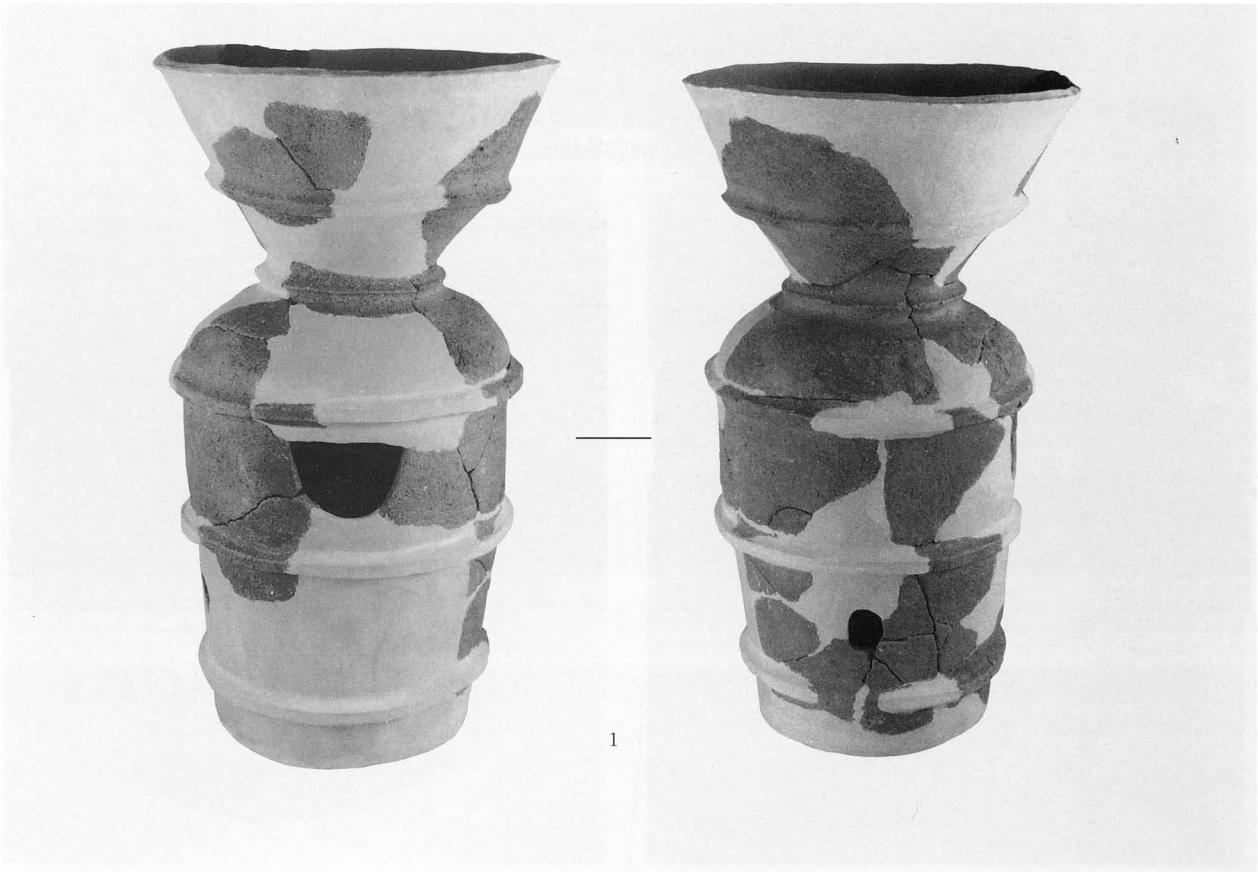
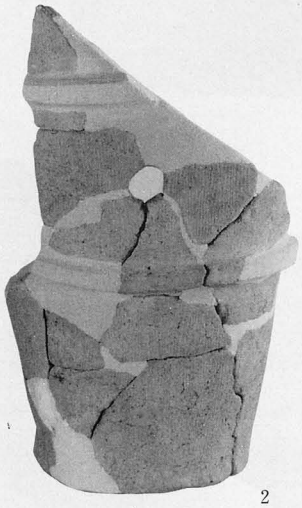
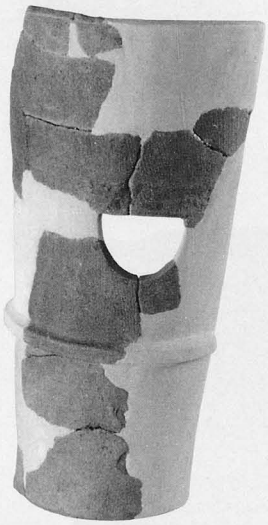


写真29　6号墳出土遺物(2)

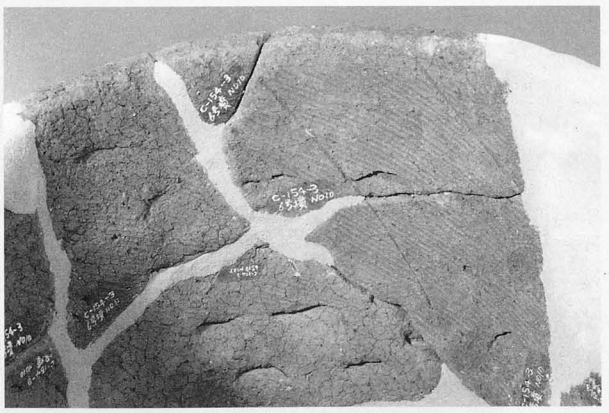
1



2

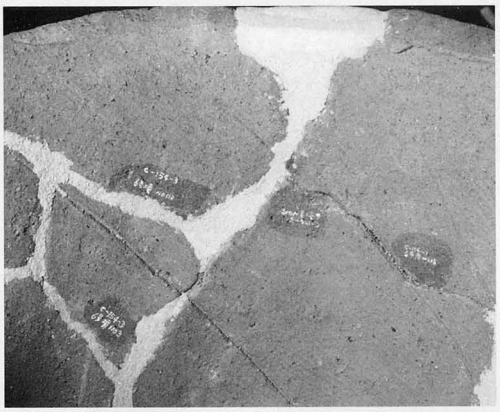


3

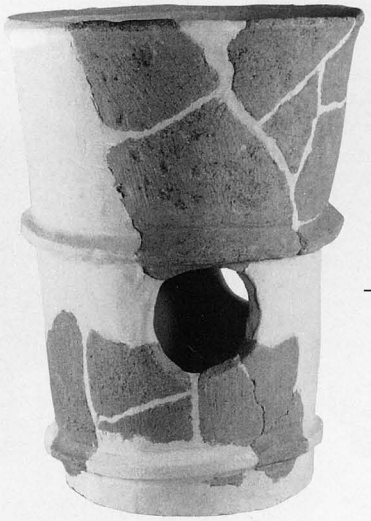


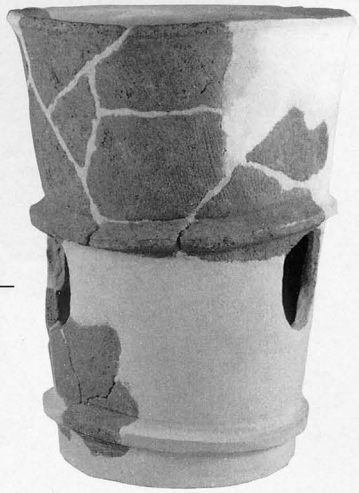
4 a

4



5 a





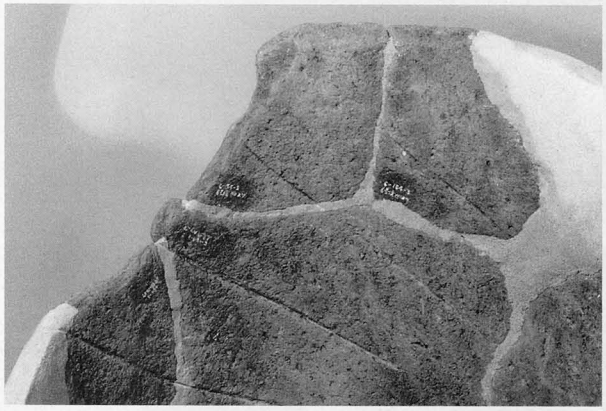
5

写真30　6号墳出土遺物(3)

1

3

4



2a

5

2

6

写真31　6号墳出土遺物(4)

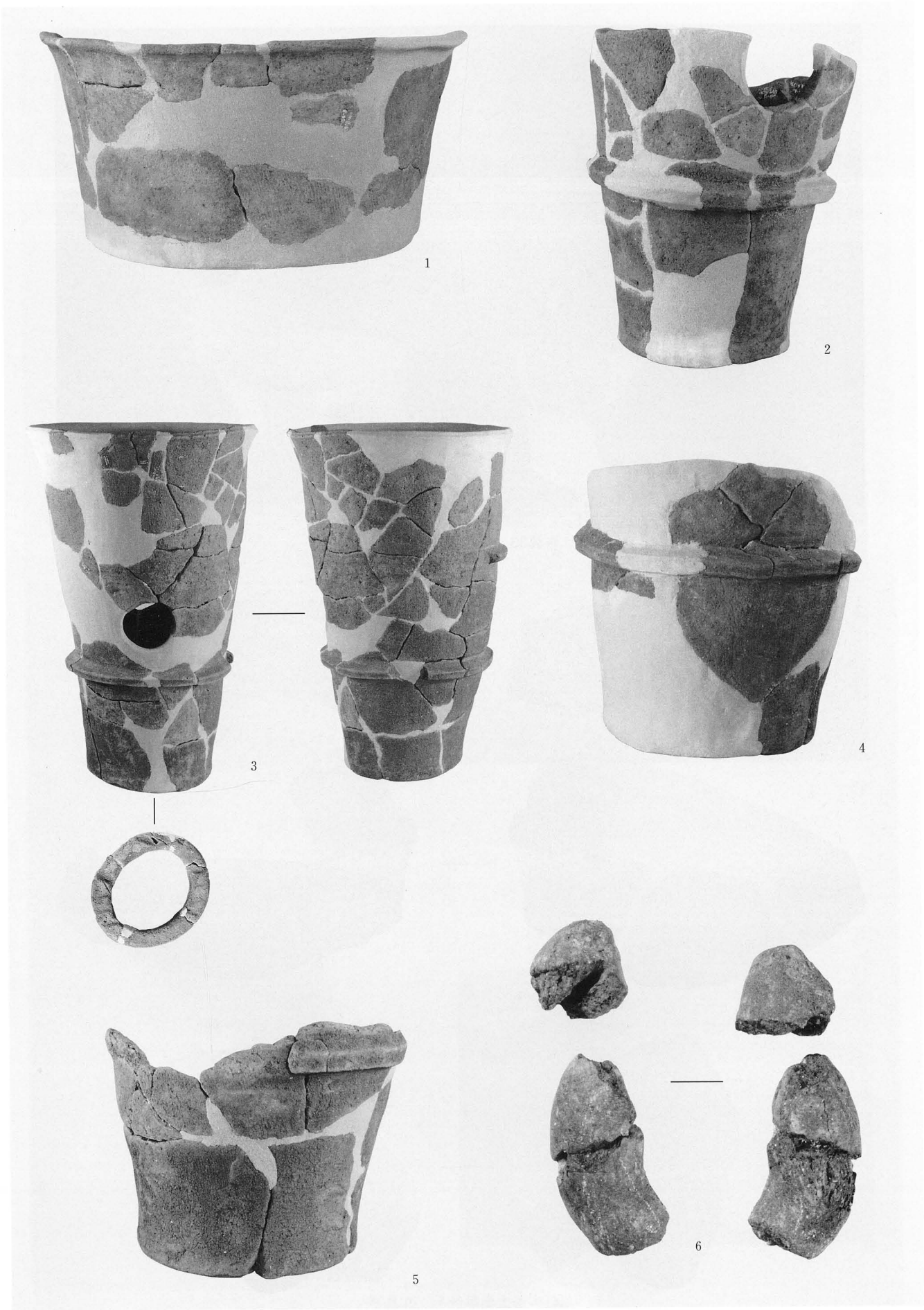


写真32　6号墳出土遺物(5)

写真33　7号墳出土遺物(1)

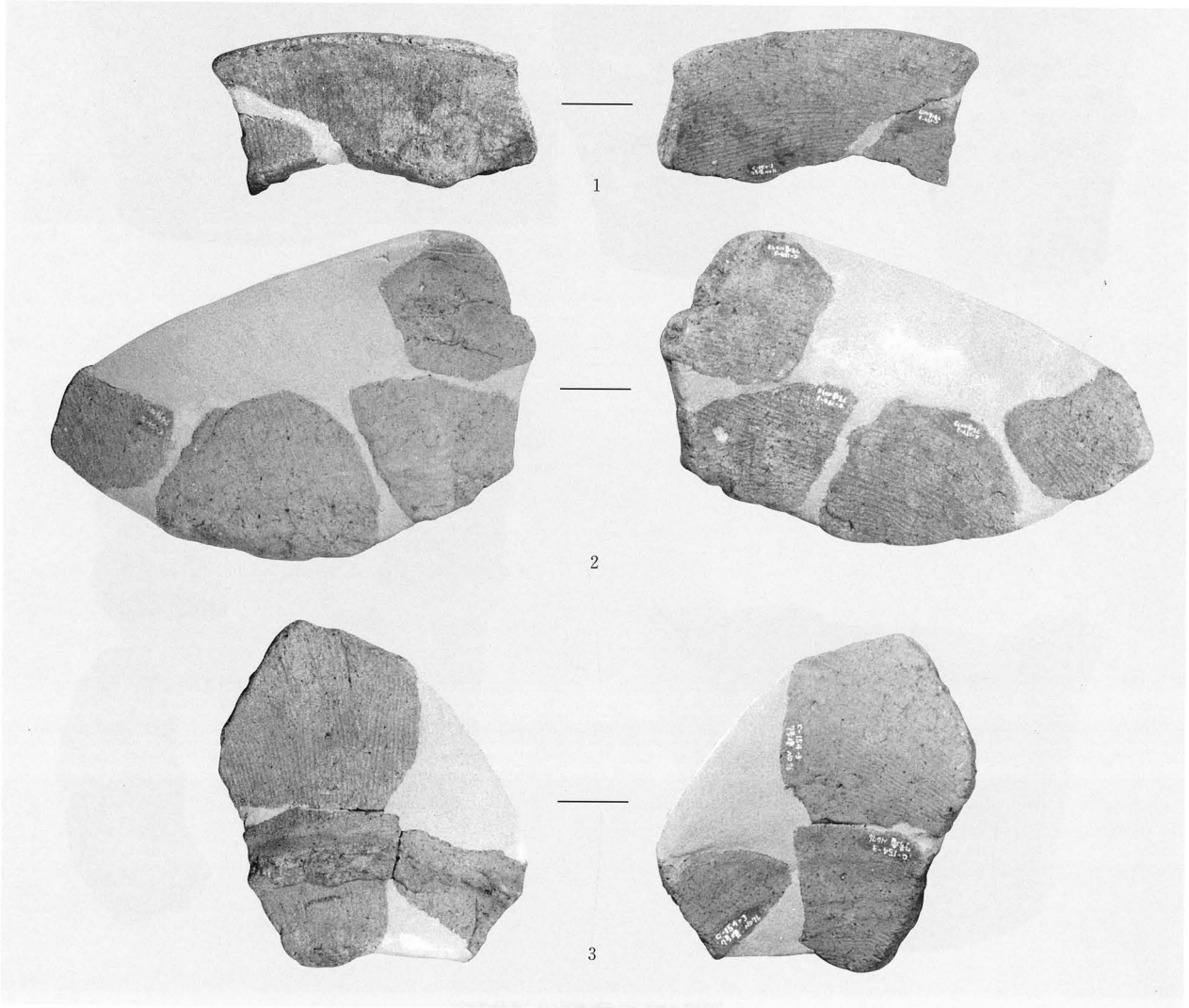
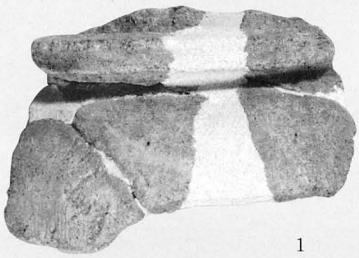
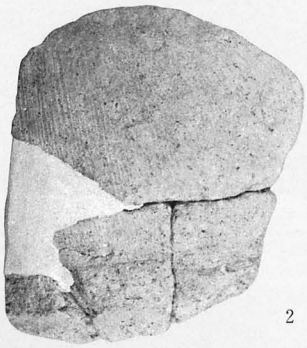


写真34　7号墳出土遺物(2)



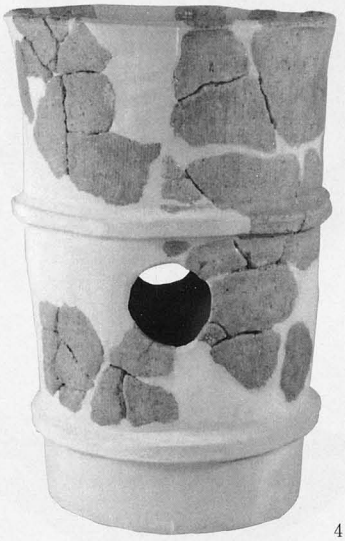
1



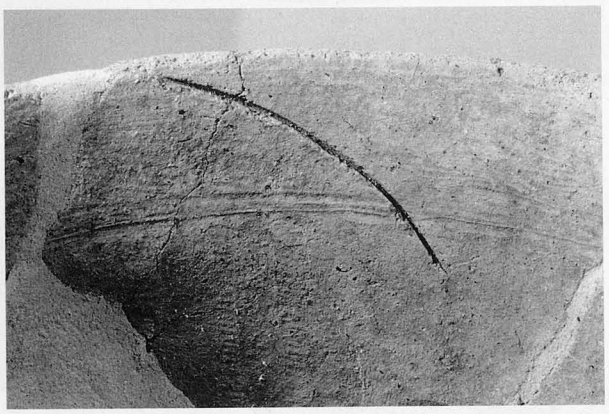
2

3

3 a



4



4 a

写真35　7号墳出土遺物(3)

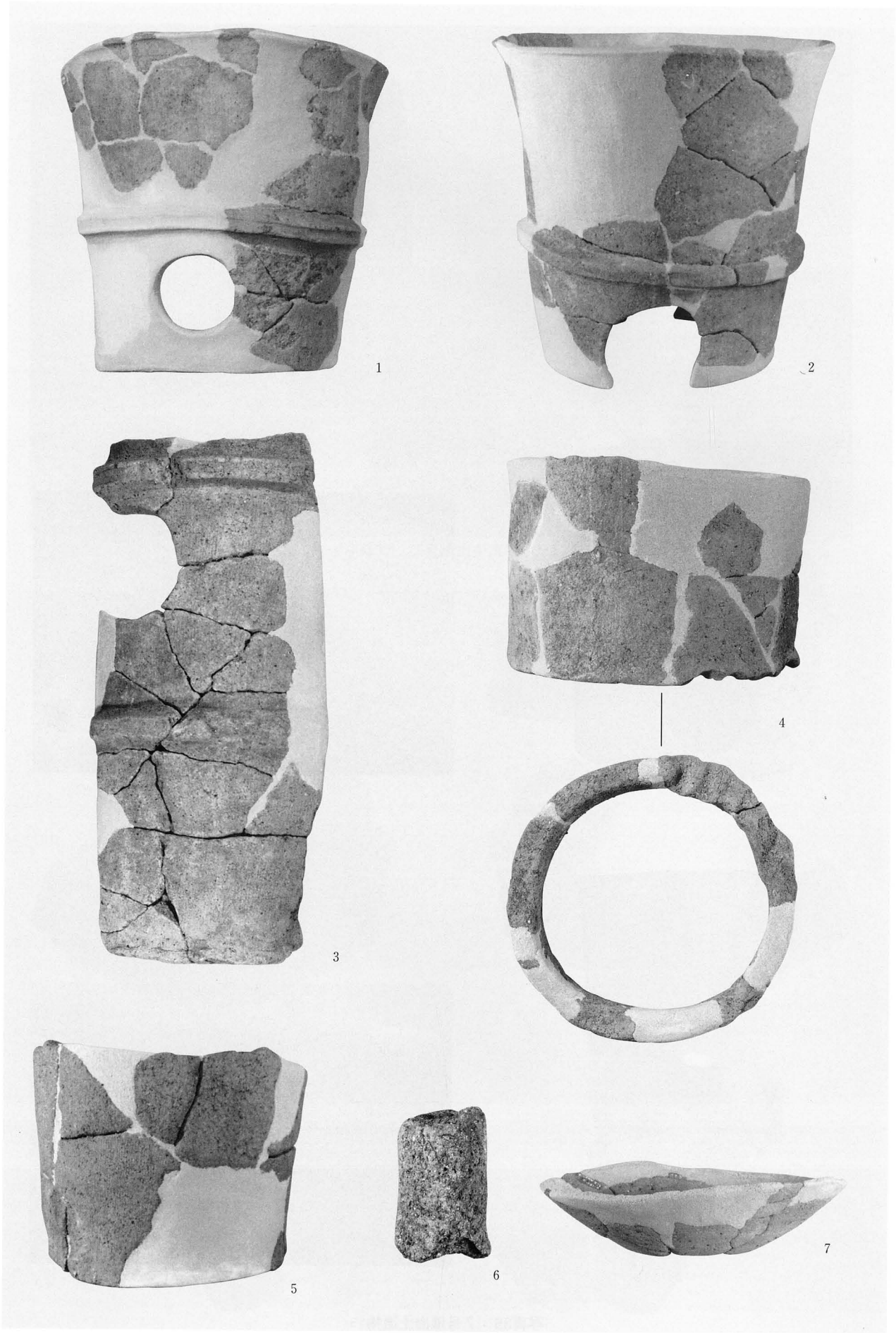


写真36　7号墳出土遺物(4)．SI－8出土遺物

写真37　SI－9出土遺物(1)

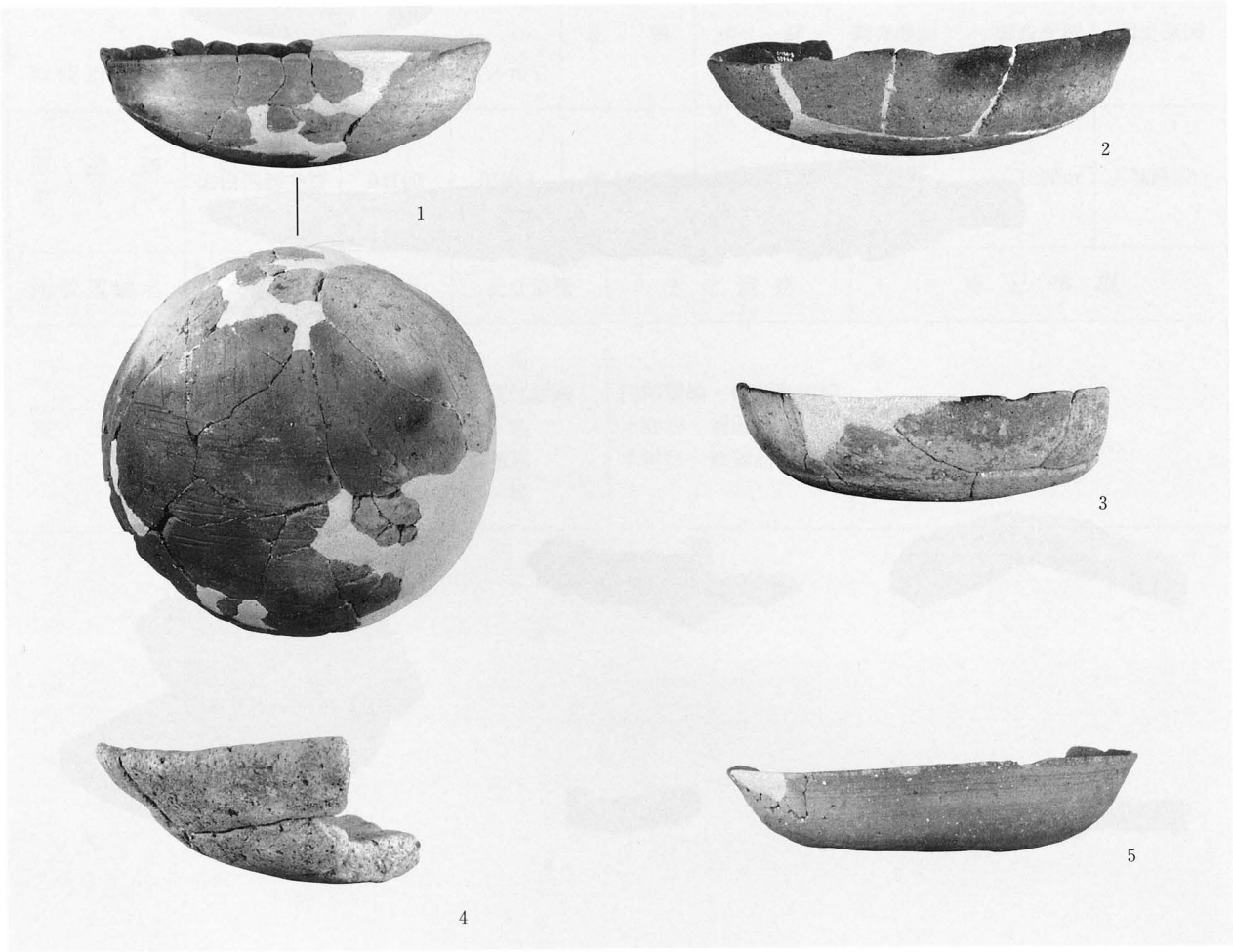


写真38　SI－9出土遺物(2)

1

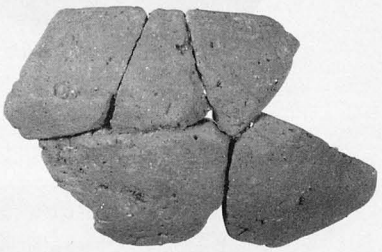
2

3

4

5

6


9

7

8

写真39　SI－9出土遺物(3)．SK－35・36・37出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はらいせき
書名	原遺跡
副書名	第3次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第240集
編著者名	主浜光朗
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号　TEL022－214－8893～8894
発行年月日	1999年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
原遺跡 第3次	宮城県仙台市 太白区西多賀 三丁目	04100	01083	38°13′10″	140°51′38″	19980731 ～19981007	1200m²	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原遺跡	古墳群 集落跡	古墳 奈良 平安	円墳 竪穴住居跡 土坑 土壙墓 溝跡	円筒埴輪・朝顔形埴輪 土師器・須恵器・瓦 土製品・鉄製品	

仙台市文化財調査報告書第240集

原（はら）　遺　跡

—第３次発掘調査報告書—

1999年12月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課 022(214)8893・8894

印刷　株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24－24
TEL 263-1166